

郎路生麻·幹主

川柳雜誌

號 月 七



大正十三年三月三日第三種郵便物認可

昭和七年七月一日發行(毎日一回一日發行)

第九卷 第七號

川柳雜誌社發行

本社七月例会

日時 七月五日(火)午後七時

會場 大阪市南區千早町日本

橋北詰西の辻北入東側

ちみせ俱樂部

電話南二四五番

兼題「肌」三句 路郎選

會費 金參拾錢

初心者の來會を歓迎致します

暑中見舞の

廣告を募る……

◆一口 金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁

希望の方に限り金七圓一口分の

原稿はなるべく簡単に願ひます

◇申込期間 七月十日迄

(八月號に掲載)

各地支部増設

柳壇のため且又「川柳雜誌」のため眞面目に支部幹事を引き受け極力擴張運動を援助してやらうといふ川柳家は本社宣傳部へ支部設置希望の旨を申込んで下さい。

川柳雜誌第九卷第七號目次

文苑

創作

武玉川初富研究(二)

梅本秋農屋

不朽洞句稿

麻生路郎(一)

柳の絮(五)

森東魚(三)

近作柳樽

麻生路郎選(六)

赤い鴉

蛭子省二

光耀抄

麻生葭乃選(三)

千日前今昔史(一)

長野吉高(三)

川柳塔

同人・社友(六)

「寶の帖」漫興(四)

岩本素人(三)

粒々集

諸家(五)

あなぞら

木村半文錢(三)

各地柳壇

……(四)

ひとり言二つ三つ

蛭子魔十窟(五)

一路集

(課題吟)

其の後に來たもの

澄田羅門(六)

織

福田山雨樓選(五)

大阪で拾ふ

天痴人(七)

階

朝田新水

東京句だより(二)

吉田水車(八)

段

中島鐵洲 共選(三七)

京洛の一夜

石曾根民郎(九)

編輯の窓

路耶(五)

殿町にて

松盛琴人(四)

西之町メモ

鶴峰(五)

初夏の歌

十三絃堂主人(四)

表紙

森田ひさし

街に住めば

久流美(六)

照字

麻生路郎

大和、伊賀、伊勢

松丘町二(七)

高橋かほる(八)

松丘町二(九)



不朽洞句稿

麻 生 路 郎

新發意へさんざんさ降る銀の雨
死所さして京の格子の中にある
歩をついたままで待たせる小商ひ
テロ棄てゝ死を待つ人になり給へ

西山氏の轉居を祝して

奥さんの返事は藏の方でする
君・君・もう少し静にし給へ蠅
學校の倫理で行け奴ば死ぬころ。

武玉川初篇研究 (三)

武玉川初篇研究 (三)

梅 本 秋 農 屋
森 子 東 省 魚 二
蛭

(12) 取付安い顔へ相談

秋農屋 鼻の下の長いのを看取つて、女から持懸る相談であらうが、迂潤に其舌に乗るこ、後に至つて損の卦が出る。

東魚 「取付安い」こいふ言葉の馳驅が、實に巧いと思ふ。

一寸はじめに近づき憎い様な性格に對して、「取付きが悪い」

こは私も現仕用ゐて居る。此句の人物は秋農屋翁のお説の如く

も取れるし、又單に普通友達なごに窮狀を訴へる場合にもこれ

る。要は前句の趣き如何によつて治定すべきであらう。

省二 川柳の方では「相談は取付き易い顔へより」こなつて

居る。關東大震以來の浪人たる私でも、金策の相談を持たまれ

て、若干取付き安い顔かナミ微笑する。

(13) 夢て居る子を入れる誓文

秋農屋 睡つて居る幼兒を誓に立るこいふの歎。句意が明瞭

でないと思ふ。

東魚 此の御恩に對しては、此子が成人しましたら必ず、御恩返しをさせます——こいふやうな場合であらう。

省二 そういふ場合にも解せられる。やはり前句の事情が知りた。

(14) 入もせぬ聲の能く成寒念佛

蛭子 寒念佛でも御詠歌でも、仲々聲自慢こいふ遊戯氣分なのがある。「聲色で歸るは宵の寒念佛」この手合には、いりもせぬ聲こころではないわけかもしれぬ。

秋の屋 東京に於ては、現代でも寒念佛がくる。稀に寺院の住職も出るが、多くは所化が小遣錢を稼ぎに出るらしい。昔は淨瑠璃を習ふ女子が、寒聲こ稱へて、早朝に物干臺なごに上り其處で唄を謳つたが、かくするこ聲がよく成るこ云つた。

東魚 自然に寒念佛のお蔭で聲がよくなる。あの聲で一番長
唄でもオレが聞かせたら、其處等の娘達にヤイノ〜云はし
てみせるのだが、オレは合憎この體から聲……こいふやうな心
持ちを陰に連想させられる處に可笑味がある。寒聲に就ては秋
の屋翁のお話の通りで、私の母なごも寒聲をやらせられたさ
である。物干だか火の見たか（大屋根に火の見臺があつたもの
だ）でやつた云ふ事だ。一時は咽喉から血が出るさうである

(15) 取揚婆々をしらぬ退分

秋農屋 中仙道追分宿ではない歟。此邊の女達は分曉の時に
臨むでも、取揚婆を呼ばずに、自分で始末する云ふのではな
い歟。又宿屋の飯盛女が自身で墮胎をするのではない歟。

東魚 「西は追分東は關所」こいふ。其追分ではあるまいか
つまり僻地であるから特に取揚婆さんなごはるない。お互に馴
れた年寄連が産婆をしあふこいふのであらう。

省二 そうですか。するに秋の屋さんの前説のように思ふが

(16) 物忘れあしな所を横に見

省二 物忘れはへんな氣もちのするものだ。横に見るの表現
句に「呬の横に見て居る餘所の顔」（不斷櫻）

秋農屋 自分では少しも氣が附かぬけれども、斯る場合は屢
々有る事と思ふ。

東魚 ふみ横を見た途端にアブナ繪式のエロ氣分の光景をみ
た——それが「味な所」なのであらう。其拍子にオヤ今何を考
へてゐるんだつたか……こいふ氣分であらう。

(17) 神輿洗つてゐる拜殿

省二 神々しきがある。

秋農屋 六根清淨。

東魚 「這る」が面白い。這る動作でなく、夥しく水が板の間
や階をぬらしてゐる光景を彷彿させる。潑刺した調子が爽快
である。

(18) 關二ツ有ともしらす出來心

省二 若氣のいたり、箱根今切で調べられる事は、みんなに
恥かしく心苦しからう。（因に關手形は女子の分であつた）

東魚 「有こも」はアルトモカアリトモカ、讀方は何れが良い
か、後者の方がよいと思ふ。「出來心」こいふ氣分が斷落にはご
うであらうか。何んもなく關二つこいふ事からして扱參らしく
私は思ふ。關手形の事は知らないが「道中袖かかみ」を見るに
箱根の項に「女人に武具は御證文なくては通さず鎧もたせざる
者は主人の手がた、あるひは所の庄官の手形持參して通る」こ
あるから、男でも手形は要つたのではないのか。

秋農屋 此の「有」はありと調むのが正しい。而して東魚君
説の如く、扱參りらしく思はれる。私が二歳（文久三年）の秋
祖母に母が箱根の温泉に行つた時、遊覽の旅であるから、關
所の西へ行くかも知れぬとて、町奉行より關所通行證を買つて
行つた、ご父母より聞いた事がある。此通行證（切手ならん）
は、町奉行のオハチ判こいふ、丸の内に松の字の彫刻してある
黒印を捺してあり、普通の切手よりも貴重なもので、關所を大

威張りで通行が出来るものだから。オハチミは如何なる文字を書くかは、私はそれを聞漏した。これを貰ふには多分の費用が出たさいふが、恐らくは其筋への賄賂であつたらう。

省二 此句の場合「出来心」に軽味があるから拔參説面白し古句に「關守が笑つたさいふ拔參り」。私は幼時ナゴヤに住むでるたが、拔參の話はよく聞かされた。伊勢へ近い丈けに近所の雇はれ人がよくやつたもの、私は拔參ではないが、ナゴヤから徒歩で伊勢參拜した事もある。

(19) 目へ乳をさす引越の中

省二 〓ゴミが眼にはいつた時、乳をさせば、直に除き得るさいふ—(乳は目薬代用にされたものだ—)句は古句に澤山ある。

引越や大掃除にはあり勝ちな事であらう。なごやかさが窺える東魚 〓乳母がある男にでもしてやる場合らしく思ふ。淡い色模様もあるやうに思はれる。

秋農屋 〓「ほれて居た突目へ乳のはしり過ぎ」の類句であるが此方には戀の意が無い。

(20) 夜はほたるにとほされる草

省二 〓螢籠には艸をいれる。螢は水分によりて、光を發する力を得る。

東魚 〓「こぼす」は性交行爲を意味する。それを洒落て、螢の艸の親しさをかう云つたのであらう。

秋農屋 〓東魚兄説は、少し考へ過ぎではない歟。晝は草に隠れてるた螢に、夜は照らされるさいふのであらう。

(21) 正直に大工の通ふ寶寺

省二 〓寶寺に就ては、曩に本誌に掲載した拙稿「寶の帖漫興」に、類句を澤山あげた。

東魚 〓「こんだ靈寶をならべ立てる段取りに、眞面目に大工が通ふさいふ皮肉味を匂はしたのではないか。」

秋農屋 〓山城の寶寺は、屢々武將の旅宿になつた事が歴史に有るから、此處へ通ふ大工等も、不正な仕事は出来ぬ云ふのであらう。

(22) 舞臺から飛を傘屋は觸歩行

省二 〓「清水は女に羽根の生える所で、戀のため京の清水の舞臺から傘をさして飛びおりたさいふ句は、かなりある。外ではこんな話を餘り聞かないようだ。現代興味なら飛行機結婚もあるのだから、戀のバラシユートなごも實現する可能性はありそうだ。」

東魚 〓大奮發をする事を「清水の舞臺からこんだつもりで」なさいふ。先づ江戸の洒落ではなからう。矢張り地元の京の洒落だらう。兎に刃命がけで飛ぶので洒落や道樂じやない。「長命願」さいふ教訓がかつた戯作の中にも、女が舞臺から傘を持つて飛ぶ圖がある。其傘が命さいふ文字になつてゐる。(これより前の黄表紙に同じ趣向の圖があつた筈。此本の方が其眞似をしたのに違ひない)

秋農屋 〓何か念願のある女が、舞臺より飛んださいふ實談が某書に有つたさ記憶する。

(23) 丈イくらへ手を和らかに提て居

省二 古人はこまかい觀察をするものだー私は幼時背競べをする折り、ツマ先きで立つて柱を、ねぶつたものだ。が、これは手に随分力をいれる。

東魚 親しみのにじみ出るやうな句だ。

秋農屋 此の句は伊勢物語の筒井筒の情話を詠むものである。

(24) 晝はたはけな陸奥の玉河

省二 新古今には、「夕ざれば夕風こして陸奥の野田の玉川千鳥鳴くなり」云。

東魚 千鳥の趣きは夜の淋しさが命だーこいふ心持ちを「晝はたはけな」云奇抜な現はし方にした處が手柄であらう。

秋農屋 薄暮になるこ寒い夕風が吹つけれども、書間の日闇なる頃は、頗る長閑だこいふ句と思ふ。

(25) 宵の謡の通る寒聲

省二 「寒聲も金にするのは哀れなり」の通り句はあるが、この句はお道樂謡自慢であらう。尤も初心の折りの好奇心だこ解しても面白味はある。

東魚 外をうたつて歩くやうなのに巧いのはない。「へぼ詠電車が止まりきるこやめ」こいふ故夜叉郎の作を思ひ出す。

秋農屋 自慢ではなくて、熱心に稽古するのである。

(26) 皿砂鉢欲はなけれとあふなかり

省二 皿砂鉢(或は皿沙鉢)、粗雑な平らたい鉢の謂。

東魚 「あぶなかり」が面白い。「欲はなけれ」が理窟めかしく響かぬ點がい。

秋農屋 「砂鉢」を稱へて、普通の家にては餘り用ひられず、居酒屋なまで多く使用された。

(27) 毛見の草履に二人取つく

東魚 權柄つくな毛見の御機嫌をこらうとする有様を、かう詠んだのである。私の母の句に「給仕皆逃げけり毛見の鼻に飯」こいふのがある。勿論拵へものゝ句ではあるが、力の差威に對する反感が、其諧謔の中にある事が、硬骨だつた母を慕はしく思はせる。

秋農屋 現代に於ても、地方を巡回する官吏に對して、斯る詠諷をする者があらう。

省二 知事巡視の折り、一地方の有志が、靴を片足つづ、そろへたこいふ實話はある。

暑中御見舞の廣告を募る

▼ 一口 五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分原稿はなるべく簡単に願ひます。

▼ 申込期限 七月十日迄 (八月朔日掲載)

大阪市住吉區平野西之町八三

川柳雜誌社

振替大阪七五〇五〇番

廣告申込は成るべく振替を御利用の上前金に願ひます(三錢以下)の切手代用でも差支ありません。

笥が轟々さ伸るよ預金帳

疲弊農

同 同

山の膚をむくやうに疲せた草を刈る
地所少しほしい農夫によい娘

同 同
大阪 同
琴 同
人

昭和橋開橋式

江の子鳥また鐵橋を擔がされ

同 同

花柳句戯作

支那几帳そは短夜のたわむれぞ

同 同

曳子なるほぎ引つ張るこ思ひけり
良心があるばつかりに仕損こない

同 同
大阪 同
新 同
水

痴話喧嘩それも嬉しい日さなりぬ
手切金一生喰へぬ悲しさよ

同 同
同 同
同 同

看護婦の手の冷めたきもさびしまれ
お妾になつたを近所嫉んで居

同 同
大阪 同
里 同
十九

惚れられてふみ子の事を思ふなり
不始末へ父はフロンミ云つただけ

同 同
同 同
同 同

ハ一モニカ吹いて毎晩通る子よ
初夏の陽を格子に家が揉めて居る

同 同
大阪 同
雅 同
幽

晩酌のたこさ胡瓜で肌を脱ぎ
暗殺の世にもわたくしのうたたね

同 同
同 同
同 同

浴衣は輕し女房の縫うたもの

鳥取 同
鐵 同
洲

草の汁が爪にしみこむ
働けとは
蟻が教へてくれた

無言の教訓だ
E

唄——
それは俺の悲しい魂だ
風の中に唄ひつゝる
すがた

それが本當のかなしい
俺の姿なんだ
F

青空は答へず
山は答へず
自刺に硬ばる肉塊と
ケラケラ魂が嗤ふ
絶望!

爪が伸びるだけ
爪が蒼白い
貧血な空だ
H

悲惨な肉体を
轉してゐると
青空がウムツと應へる、詩
それが川柳だ
I

川柳は
俺の
泣く魂の表現なんだ

ひとり言ニツツ

一九三一、五、三〇夜

天 痴 人

人を信ずる事は割合易いが自分を信ずる事

来られない？出られない！で受話器かけ

神戸異人山にてルンペンと話す

同 同

生きる丈けならば私も乞食する

西安縣城内にて

同 同

男 装 で 姑 娘 春 を 賣 に 來 る

公安隊の一人帽子が歪んで居

撫 順 柳 路

衣裳をつけても車は来てくれず

国旗はひるがへるなり家は留守

大 阪 緑 雨

圓タクを値切る手筈も添へてある

路 耶 師 へ

松 本 民 郎

酒の香の男となりて會ひに來む

奈良を一人ぼつちで

同 同

うなづいた鹿に案内頼まうか

三笠山の見納めに

同 同

出でし月かもの夜を待てずふりかへり

三年振りに會ふ大阪の學友に

同 同

生きてゐるんだぞ顔を持って來た

あゝこゝに住む身の塵を拂へかし

同 同

真情のあふれに友は帽をぬぎ

良き心花を忘れてゐるたりけり

大 阪 鮎 美

が難しくなったこの壁。

あゝ瀧にうたれたいナア。二十一貫のこの肉

短歌から川柳に飛躍した俺だ。川柳は止めま

い。この頃つくづく。

六年振りに逢つた路耶師。相變らず目の鋭尖

なたのもしき。ほつとする。

素人！素人！いつまでも素人の氣持ちは忘

れまい。句の巧拙は他人様におまかせして。

——ちとするいかナア。

鉄を握る職業に引き摺られてゐる俺！嫌で

嫌でたまらぬ肥料の香。誰だ！この上も搾ら

うとする奴は！

其後に來るもの

吉 田 水 車

東京に居る〇は省線電車で毎朝 採まれ毎
夕押し合つてはともあれ 無事な日を送る一
介のサラリーマンである。しかし歸へりには
席運のよい男で、あのラッシュユアワーに不拘
妙に着席し得る機運に恵まれてゐるが、毎
日のことだからとて別段に誰に 遠慮する必
要もないので、少しは氣兼ねに似た心持で泰
然と座して其好運を満喫してゐた。電車で座
はれたこと位に斯ふも仰山に 書かねばなら
ないには必ずや深くないにしても 相當の事
情が秘められてゐるのであらふ、ことを賢明
な讀者は感知されたに違ひない。凡そ美的要
素を遺憾なく備へた一口に言へば 顔のシャ
ンゴの眼についてならぬのであつた。別

さびしい言へばさびしい片えくほ
 考へる暇もあたへず爲し給ひ
 兒の胸に耳をあてゝる父若し
 ショウグラス宵の夫婦へ美しく
 問題を問題させず師の笑顔
 風呂敷の中で動いた子の玩具
 勝つ事に決り切つてる飛車をやり
 ゲーテを解る女給のさびし

母に謝す

心地よいこゝに濟まない枕さや
 チャプリンの眼にも日本はゾンドフル

亡妹の母校にて

思ひ出は皆健やかな靴の音
 後悔の涙眞珠に似てまろし
 秀才の靴はゆつくりやつてくる
 親しさは肩のそろはぬのも嬉し
 叱る丈叱つて主人風呂へ行き
 愛人の視線は人を越して來る
 あゝ勝てり明日はあしたの風が吹こ
 春夏秋冬思ひのまゝの桐たんす
 一直線いかに淋しきものぞ知る

滋	同	同	大	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
賀			阪																						
蒼	同	同	奇	同	同	同	八	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	
太			可				步																		
			愛																						

に想ひ惱んで幼を追ふ程もOは器用な人間
 ではないが、其絶体的美人が不思議な程の
 乗車時間と出合つて荷もOが座はり込んだ
 日と云ふ日にはOの直ぐ前の吊革に悠然と
 立つのだから見ても見ないでも目につくの
 に不思議はない筈である。そうなるに假に無
 關心なOにした所が幾分自負の關心を持ち
 初めたのに異論をばさめない。そして稍冷静
 に相手の様子を観察してかゝつたのは、氣が
 着いてから五日目のことであつたが、只單に
 前に立つて居ると云ふ事より以上一步も進
 ませ得なかつたのに些が落膽したのは、同類
 イヤ同性の私として同情したものであつた
 Oがざれ丈彼女に好意を寄せたにしても自
 分の降りる驛を過ぎて迄散意を表せなかつ
 たのは流石我友なる哉である。だが賞めらる
 は未だ早い、何となれば、Oが降りる際彼女
 の行動に注意しなかつたのは、かなしいかな
 此絶世的美人の全幅の好意……とOは自信
 してゐた……を勿体なくも無上の光榮とし
 てゐた身の弱はさからである。人は變化を好
 むものである途にOも亦其次ぎに來る興味
 を追ひ初めた、しかして其後に來たものを凝
 視して呆然となつたのはOよりも私で、私よ
 りも讀者諸士であらねばならない。
 彼の美人こそOが乗車後幾らもなくして降
 車するのを覺へてOを求めらるやうにしては
 待ち待つては悠然とOの空席を獲得して多
 分は終點迄樂々と行くであらふことが判明
 したからである。

大阪で拾ふ

石曾根民郎

豫定をつけて泊りに行くといふことは、な
 か／＼に厚かましいのではあつたけれど、

罌粟の花をよめの胸がいたみます

蝿ヶ池 愚 寵



ひげめ感じて膝頭を揃へ
念を押す氣ますさにある弱身
カフエーの畫パトロンに覗かれる
音をたしかめて頬杖またふさぎ
辭職する同僚の羈氣羨まれ
筍が土を破つたさみしき健康よ
いちにさんし、いちにさんし、雨だれに悲し
ぬれてかへれば燕がならんでる

○ 子 へ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
長野 柳 同 同 同 同 同 同 同 同
鳥根 羅 門

あめ、あめ、あめ、さみしい手紙です
視察員に滿洲國の初夏なる
葉櫻にマダムこの頃變なのよ
葉櫻の雨へ忙しき蓑を着る
捨てさうに三男長女養はれ
町の灯の淡さのろく、初發が來
消火器にほこりの積んだのも淋し

百貨店にて

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
松江 天痴人
大阪 吐句坊
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
閉店のベルにお客は忘れられ
幼な名で可愛がられた人に會ひ

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
神戸 不 然

て笑つておいた。どうも縛られて入浴してゐる感じが憎くなつて來て、ふと一昨年弟と白馬岳へ登つた歸途、杵子岳、鉾岳を経て白馬温泉に高岳踏破の汗を流した。なつかしさを思ひ出した。本邦最高の温泉と稱せられてゐる白馬温泉は、絶壁、巨岩の嶮険より湧出し、原始的な自然浴槽に浸りながら、あでやかなお花島と巖そがな雪溪を眺め、微なる雷鳥の叫びに耳を澄まし、或ひは靜寂な夜を無数の星辰と語り合ふのだった。本當にうつゝ世にある身を忘れてしまふ仙境に違ひなかつた。私達は大阪の中学校の教師と入浴してゐた。こんな温泉が大阪の中央にあつたらなかつた。關西辯でいとしがつた。白馬温泉では特に設けた脱衣場はないし、勿論首にかける鍵などある筈はない。盗み着るといふあさましい心がある。何處かへ飛び散つてしまふのだらう。風呂屋のやうに番臺があるのではないから、入浴して小屋の番人に湯錢を拂つた。入浴して湯錢を拂はなくとも誰にもわからないが、そんな心根の悪い人は來てゐなかつたやうだ。小屋に特設された婦人浴場から出て來た。都の女學生がしきりにスカートからはみ出る湯上り脚を、座り難がりながらもあましてゐた目姦したところ、山のない戀だつた。とにかく私は寶塚浴場に温まつてゐた。とにする。湯上りの彼と河風に吹かれて朗らかになつて來た。開幕に近くなつたので劇場の椅子に座り合つたが、案外多いあつた。若い娘に田舎者だなと見くびられる思ひで、つむぎながら開幕ベルを待つた。歌劇を観て思つたのは、チューインガムをなめながら春風に誘ひ出される戀心といつた風な、いとも軽い氣持ちで接してゐたこと、踊つたり唄つたりする少女の半裸の扮裝

子の時の恥が美談になつてゐる

愚 師 の 計

教はつた文字では弔辭盡し得ず
爪楊子使つて悟りわるいななり
爺ミ婆ミ手をひきあうて交叉點
揚つてる氣球の下の花ざかり
あまんじて唱ふ田植の背がまろし
接吻のまゝの化石をねがうたが
この躑は地主の土をばかり甜め
踏しめて歩く世間の冷たすぎ
獨りゐるてむつくミ立てばまた空虛
子へ嘘にしたくない氣が夜のミシン
後れ毛を耳へかけてる病んだ影
怒る時怒つて男親しまれ
何年目か妻の歌つて雲雀鳴く
芽のうちひきむしられる如き世だ

病 床 吟

病床の夢は岷に似た過ばかり
酒にするための汗なる埃なる
寢がへりは暑さばかりミ思はれず
退職の主は曳かるゝブルドツグ

同 同

同 同 大 阪 大 門

同 同 長 野 有 爲 郎

同 同 同 同

同 同 大 阪 沐 天

同 同 松 本 正 司

同 同 大 阪 夜 王

同 同 笠 岡 雀 子 郎

同 同 大 阪 舟 々

同 同 愛 媛 蛙 念

を我が身につけたらさぞかし 氣の狂ふ瘦せた骸骨そのまゝのグロテスクに、異常なハンターを呼ぶであらうなぞ、苦笑したことにだつた。

夜は土佐堀の田舎じみた食堂で、大阪にゐて呉れた學友七人と三年振りで會合した。ビールも酒もあまり飲めない私は、山の湯の好色性をほめめかし又、上高也に槍ヶ岳に來たがらないつゝ、まささをなじつて酔ふた振りの氣焰を吐いた。

六日の夜を泊るべく、引き連られて吹田町まで來てしまつた。家原君の家はサラリーマンにしては、思はぬまでに凡帳面に整頓されてゐてうれしかつた。それに方階級でなかつたことが何よりのたのもしきである。午後十一時四十分といへば遅いには遅かつたけれど、未だ風呂屋は閉ぢてゐないからとこのことなので、いさゝかあてられた氣持ちで同伴した。だしかに閉ぢてはゐなかつたが、彼と二人つきりではさびしかつたし、それに五月六日私の第三浴に思ひ合へれば、笑はれぬ旅情のいとほしさがひしひしと込みあげて來たのである。今まで一日に浴場を異にして三回も十三貫の瘦せた身をさらけ出したことはなかつた。殊に湯嫌いな自分がなんの酔狂でと輕笑されても、たゞこまやかな友情に纏つてゐたのに氣が付くのみであつた。全くこれ以上入浴すれば、性來の瘦身が透き通つてしまふのだらうと思つてびびくりした。

明くれば五月七日の朝、吹田驛に一人しよんぼりなつかしい大阪の柳人等や學友の健康を祈りつゝ、上り列車の來るのを待つてゐた自分の影を拾つた。

刀根山にて

淋しさは松の緑にかこまれて
一蹴の土にも父の魂が
勉強の割にお針は下手ならず

發熱の日の夢

たゞ一人廣い芝生で泣いてゐるた
結婚なんかミ看護婦鼻であしらひ
A型が何うの斯うのミ庶子にされ
極道のさきも遮斷機横になり
湯たんぼがほより出されて春の宵
凱旋へ大きくなつて子が抱かれ
疑へば疑ふだけの返事する
ちぐはぐな心裏町歩かせる
ふみ好きに成つた女のうしろくび
宅の子も悪いさうまい言葉なり
さんな事でもやりますさ固う居る

妻病む

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和	大和
翠	翠	翠	翠	翠	翠	翠	翠	翠	翠	翠
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同

交される。さうして穩かに濟むものぞ。星の夜空はいよ／＼冷んやりとして、醉酥の頭腦を冷静に呼び戻さんとするに、反て時を忘れて、今こゝろよく詩の世界を逍遙する。
軒を並べたお茶屋の灯は、初夏のすが／＼しい夜のしめやかに物語るかのやうに、細々と光りを投げかけ、得も云はれぬ情緒の魅惑は、甘い香りと共に身の廻りに漂ひ流れる。「流水豈情無からんや、柳は緑、花は紅。」誰やらがそんなことを口走る。忽ち批評は一決される。其美事さ現内閣に確を見せたい位OK、と聞か、平常は付き切つて居なければ、ものを書かぬ。先生、其足の輕い事、恰も火星に飛込んだ人のやうに、宙を飛んでゆく其後姿を見てR君とK君は拍手を浴びせる。

◇
そうぞすえなあ、ほんまに、もう何年になりますやろえな、あれきりお會ひやさへんえ、ほれ電氣の温泉へ、わても遣入るいうておこられまいたなあ、途中でお會ひやしてもよう判りやへんぞすえなあ、そうお見えやすかないそんなこと、ありまひよかいなあほらしや、アレ綺麗え、な、星がきらきらと光つておすは、あて「も」知りまへん。……彼女はつと立つて、手摺から丸山の空を眺める。其すれた後姿も美くしい。路郎師の奮作に、

逢ひたかつた逢ひたかつたと裾をふみ
水銀がちな戀がちな夜や
幻の黒髪となり脚となり
戀の寝あの眼だらうか眼だらうか
京の情趣にふきはしい場面は初つげながら
展開される。私はひそかに彼女を素寫すると共に一句を待た。

すれさして後る姿を眺めてゐ

太陽を見て居る者の無い世界
 金持にしては話がわかり過ぎ
 いかり肩五尺五寸で嫁に行き
 崖崩れ崩れた形に草がはへ
 かしわ屋の朝をつけてる鶏よ
 ソブラノが春の街路を轉けて來
 豫期しないお叩頭の顔が一つ殖え
 爲すこもなさず心をいらだませ
 熊笹の創へ清水の溢れるよ

長 女 生 る

産聲の軒に國旗がひるがへり
 絶景にかゝはりもなし機關室
 活動を促がす音で夜が明ける
 赤ん坊ののびる力の鼓もよし
 断 髪 の 髪 の 亂 れ に 惱 む 戀
 猫 の 顔 丸 く 春 の 日 柔 し
 長男さいふみじめさに金の守
 法被着て讀む新聞は覗かれる
 若い父會社で乳がたるたらん
 便衣隊の涙、笑ひのこまるすよ
 病む子供父へ無心の笑を見せ

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
句	愛	一	白	柳	青	あ	無	憲	青	白	嶋	正	巴	富	一	吞	詩	菊	岩		
林	緒	久	子	次	兒	美	鬼	坊	米	峯	牛	男	人	雄	笑	吸	郎	路	石		

際立つた富士額。漆黒な瞳、濡羽色の髪のはつれが一二本、鼻筋の通つた、眞白い面長な顔に、双眸の邊りをほんのりと染め、細い襟足が、其なだらかな撫で肩へと七り込んで、雪の肌を想はせる、曲型的の京美人、まるで歌麿の畫からぬけ出したやうな美しく、小難い一菊時の間に來たのことも其處には、よれ子さんが照葉なごいふ綺麗處が並んでる。お酒の酔は遠が頻りにモーシヨンをかける。お酒の酔は遠慮なく出る。一座はいよく陽氣となり、思ひもかけない隠し藝が飛び出して、アツと云はせる。斯ふなると映畫説明なら暗い處から黄色い聲をばり上げて。「富も榮華も權勢もそれは野に咲く百合の花の一時より、儚ないものなり、この幸福は離されぬ。濃麗な容姿に優雅に美しく、彼女に、上品な京言葉に、跪つかふよ。なにもかも忘れて戀のめしいに、ならふよ」と情熱の焰は今炎々と燃え上つて來る。オ、享樂のクライマックスよ、といふ所であらふ。

名をすて、十七八の戀もせむ 路 郎
 京の都は白々と明け放れた。鐘は靜かに、未だ歡樂の夢に浸る枕に、おぼろりと鳴り終る。やがて眠より覺めた人々の瞳に、新緑水も滴るばかりの東山の朝景色が、爽かに二階一杯に現はれる。期せずして五人の目は、へ……時計の針は正に完全に全面を二回轉してゐた。

殿 町 に て

久 流 美

あれ程の醉態を見せたに拘はらず、よくぞ御辛棒の上附合つて下さつた、兄の厚意を深謝する。松水、井々樓の兩兄に見送られて

花 臺 屋 根 の 埃 を 見 る 二 階
 枝 振 り に 頓 着 も な く 伸 び て ゆ く
 ま つ す ぐ に の び よ た け の こ ほ ら れ る な
 春 の 山 に 父 は 盃 か る く 上 げ
 辨 當 を 大 事 に か へ 酔 つ て る る
 け ん け 畑 残 つ た こ ろ 水 が あ り
 故 郷 に 墓 あ り 手 元 不 如 意 な り
 向 ふ 向 い た 肩 な め ら か な 線 で る る
 手 踊 は 社 長 さ あ つ て 坐 り か へ
 よ ひ ざ れ へ ヘ ッ ト ラ イ ト が す ぐ さ え
 シ ャ ン デ リ ア こ の 貞 操 を 知 つ て る
 灯 を 消 せ ば 部 屋 に 若 葉 が か ほ る な り
 冗 談 の や う に 貧 乏 を 笑 は れ る
 松 の す き ま か ら の 陽 が ま ぶ し い
 現 實 を 離 れ て く れ る 夢 を 戀 ひ
 酒 買 ひ に ゆ け は ヒ ャ ッ コ リ 燕 り た
 一 本 の 煙 突 村 を く ら く す る
 春 雨 の ガ レ ー チ 皆 な 出 て る ま す
 豫 報 を ば 大 事 に 晴 衣 傘 を 持 ち
 上 役 の 話 不 安 な 椅 子 で 聞 く
 煉 瓦 小 路 按 摩 眞 直 ぐ 笛 を 吹 き

同 同 神 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 戸 麥 洋 松 寒 英 晴 康 公 湧 秋 黑 鯉 錦 灯 南 方 小 葉
 刀 花 雨 子 樹 夫 夫 平 水 草 子 友 石 子 子 眠 園 光
 竹 耕 千 麥 洋 松 寒 英 晴 康 公 湧 秋 黑 鯉 錦 灯 南 方 小 葉
 風 人 葉 子 花 雨 子 樹 夫 夫 平 水 草 子 友 石 子 子 眠 園 光

汽車にのつた途は殆ど夢中、車掌に起されて
 雨の金澤驛に吐き出されたのは、夜も十二時
 を過ぎておたらう、モータータクに身を横た
 へて、それでも無事家のパパになった。小松
 にある時君が心配してくれた、あごのヒゲは
 漸くけふ(二十二日午後二時)レザーで剃り
 落した、驛前の秋下旅館に刺つて貰はなかつ
 た事は寧ろ幸福であつたかも知れない。あの
 夜、色男になり済まして、小松にむほん氣を
 起さなかつた丈けでも……

酔はれば喋舌られぬぞ弱い人間はないと
 思ひつゝも、酔ふてヨタを飛ばした久流美の
 心境にも思ひを走りさせてくれ給へ。小松町の
 同人諸子に迷惑をかけつゝも、彼等は決して
 悪い氣持はもつてゐなかつたらうと思ふ。あ
 れから銀氏にも未だあはない、けふ電話で、
 よろしくと傳へて置かう。

Yへの雲丹も氣の向いた時送る、雲丹にナ
 ダの生一本を甜めながら氣焰をあげたいと
 思ひつゝも、當分上阪の機はあるまい。Yさん
 にもよろしく傳へて下さい。

△大阪の煙、金澤の雨旅は憂し
 △鯨屋の灯ヘッドライトと別に照り
 △大廣間酔ひ過ぎて残され
 (福源の夜)
 又のち程手紙を書く、線雨、かほるの兩君
 にもよろしく。(四月二十二日)

初夏の歌

松丘町二

其の一

私の魂は私のものだ。

はなれをば貸して先生笛を吹き
失戀は鏡こはなれやうこする
金ひらうたは現實でなかりけり
壁出して泣けぬ自分の淋しさよ
燕が來た素直な私になつてしまふ
贅澤が借家住ひにまだぬけず

メーデー風景

依頼心が列をつくつて歩んでる
社長にはあまりに用のない俺だ
生活の爲めに穿くこは見えぬ靴
春宵の千金何處で求めやう
再婚の妻は保険を快諾し
青空を見上げて彼に戀がなし
何事が湧いたか妻の早い足
儲けてる厚司の尻に繼をあて
二日目のひげが病人染みる俺
合掌をして成金になりたがり
春の夜を笑ひ過して痛む腹
天さ地が逆さに今日も暮れて行く
シユミーズを衣桁にかけたミス部屋

同 幸 村
同 豐 次
同 一 正
同 京 都
同 富 美 三
同 司 郎
同 曲 豆
同 堺

同 光 外
同 美 夜 路
同 鐘 生
同 南 葉
同 愛 媛
同 世 都 象
同 耕 都 期
同 孤 鶴
同 晴 比 古
同 虹 一
同 松 江 二
同 雪 丸
同 汀 華
同 石 川 白 花 子

肉体を離れてき迷ふことが好き
若い女の生毛は
煤煙が空でつくつて地上へ還す
硫酸が犯されて
かさゝと鳴る
電話器にばいきんを養ひ
嘘を指の股にくつつけて
さてハンカチは白くない
屈辱に染む全身の油汗
腕時計は腕でうめき
靴下かもの凄い体臭を放つ
あゝ、黄昏の低い塙へ
一錢銅貨のやうに穢れてかへる
私の魂

其の二

颯爽と泳ぐ朝の氣流
霧はしつとりと睫毛をぬらし
やがて
匂ひを持った風が
女の羅の裾に戯れ
青い空と白い地上に
初夏の情熱はみなぎる
朗らかな笑の連続
黄昏くれげ
燃上る電車のスパーク
君とひととき

街に住めば

高橋かほる

中崎町の空地で東西家が劍劇を初める時。三
味線弾きのパチが糸に當る瞬間、パチが欠け
ました。東西家のつめびきなんて、まの悪いと
思ひましたら劍劇を樂しんでた。見物の中のお
おばはんが「東西家はんパチあげまつさかい

珍らしい人を圍んで夜が更ける
 投げつけてやりたい紙幣を握りしめ
 つぎ／＼に食つて藝者にほつこかれ
 プン廻しこれだけ俺の世界なり
 吸へるだけ吸うて動けぬ蚊を見ずや
 あの椅子のかつてふんぞりかえつた椅子
 懐に足袋のぞかせて湯のかへり
 吸殻でした苦力ミの間接接吻
 花見酒鬚を崩して拳をうち
 努力して生きる片輪をなぜ笑ふ
 果しなく直線道路の目の疲れ
 血のにじむやうな苦衷を秘めて笑み
 女給の耳を蓄音器にうばはれて
 放免の姿踏まれた草に似て
 貰の輪社長が笑つたから笑ひ
 秘密まで聞かれ半分やつこ借る
 白幕の搖れに似た世を笑ふたり
 若葉がそろつて息してる朝の庭
 今更に子供へすがる養子で居
 ロマンズはけだし黄昏以後の作

同 今 雨
 同 醉 羊
 同 革 刃
 同 柳 村
 同 柳 村
 同 湖 山
 鳥 取 湖 山
 同 耕 民
 大 連 三 碧
 同 薰 象
 同 木 喰
 福 岡 木 喰 象
 同 壽 惠 兒
 同 壽 惠 兒
 同 河 鳥 流
 長 野 風 亭
 島 根 鴉 天
 東 京 白 丘 土
 尼 崎 虛 白
 朝 鮮 如 空
 伊 勢 享 史
 不 明 鳴 玉
 大 阪 吞 空

一寸待つてなはれや——早速バチを持つて
 来て東西家に進呈しました。

東西家「おうきにゑらいすんまへんな」

大和、伊賀、伊勢

松丘町二

大阪より山田へ

山を背にせゝらぎをきく家々の瓦のいろを
 なつかしむかな

山々へおりきし霧は徐るに窓の外の前へ追
 りきたれり

「香落溪當驛より南二里」名張の驛にそばえ
 降りくる

すゆにして雨は霽れたり點々と粉雪の如く
 白きは栗の花

鬱々と檜の緑や々と雑木の緑伊賀路ゆく我
 丘を覆ふ葡萄の若葉親しきよ目近が黄なる

は熟れたる穂麥
 トンネルを出でたるときに眞白きは二敵あ
 まりに咲ける蕎麥の花

志摩 灘

戯れに投ずる銀貨争ひて捲れつゝ洗む海女
 の足裏

美しき齒並をみせて笑ひ合ふ海女の顔立素
 直なりけり

伊勢 大神宮

凡人の穢れを積みし我にして 五十鈴の川に
 顔雪ぎけり

白き砂静かに踏みて歩むとき 冷え／＼迫る
 聖なる大氣

神の杉の木の間木の問ゆ六月の光は落ちて
 我が靴の上に



柳

の 絮

長 野 吉 高

(一五)

飲稅莊主人の鳴絃君から手紙が來た。格好な家が見つかつたから見に來い、こいふのである。雨軒居士が、何か家の事に就て無駄口たゝいたのを眞に受けたのだらうが、頼んだ本人はそんな事はけろりこ忘れてゐる。妻君だけは大眞面目でこの機會に是非とも家を見に行く、こ主張する。日頃から、やれ別莊を建てるの、地所を買ふのこ、金も無いくせに聞捨てならぬ放言をしてゐるお蔭で、かうなつては雨軒居士も後へ退けなひ。

鳴絃君は、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮の近くに住んでゐる。印稅で建てた家なので飲稅莊と呼ぶのだらうが、すつかり鎌倉住人になつてしまつて、豆腐でチビリく酒を飲んで小説を書いてゐる。雨軒居士は、私生活上ではこの鳴絃君を既に久しい間の交りではあるが文學者としての思想的歩みは、全く別途な行き方にある。

雨軒居士は、ごちらか言へば人間生活に對する觀察者こ

しては、至極お人よしの浪漫家だ。生活への意義の探求者であるこ共に、人間生活の旨目的愛撫家であり、且つその行動に於ては物堅い保守家である。鳴絃君は全く反對の立場にある。

假りに二人の作品を比較してみても、雨軒居士は人間生活の描寫が飽まで端正で、戀愛こいふものを藝術に表現しても常に批判的であるが、鳴絃君は其れが稍々粗野で、底の底まで身を以て潛入して行き、何處までも人生を探求するこいつた行き方である。これ等の點は、個人性の差異によるこも見られない事はないが、蓋し雨軒居士は一時その藝術創作に愛想をつかしてこれを放擲し、純粹學者として立籠つたに比して、鳴絃君の方は徹頭徹尾文壇人としての仕事に専念した事が原因こ見るが妥當かも知れない。故に其れだけ鳴絃君は文壇的地歩が重高であり、其の名聲から言つてもポピュラーな傾向がある。雨軒居士は寧ろ學界方面に重視さるべきでこの點こも通俗受けがしない。

五月の鎌倉も満更悪くはない。家の事は兎も角、遊びかた々いふ至極横着な氣を構へた雨軒居士は、妻君の勤めるまゝに飲税莊を訪れた。鳴絃君も、かうなる三片肌をぬがざるを得なくなる。晝食をご馳走して、急ぐ原稿があるこいふのもほり放しにして置いての案内役もやらねばならない。

「あのライオンの檻のやうな家が孟下駄君の家です。全集物の金で建てた人ですがね。なアに安物ですよ。」

飲税莊から東南の方向に當る狭い裏通りを抜けて、畑地に沿ふた道路を曲りなりに行くミ洋風の新しい家がある。葛が壁を這ふて、ゴチック風の窓を半ば埋めてゐる。

「あの家からすつミ左の方に、松の木が見えますね。あの近くに二階の硝子が光つてる家があるでせう。あれが一頃大衆小説で賣出した茶腹君の家です。安普請なので雨がよく漏りましてね。——あの家の下手の方向に高い屋根が見えるでせう。あの家なんですがね。」

無帽着流しの鳴絃君は、悪い鼻をスウウウ鳴らして落ち窪んだ眼をギロギロさしなから、ステッキで妻君に方角を示し、説明する。ゆつたり落着いた、ねつちりこしたバスの牛のやうな感じのする男だ。

「こゝらへ隠遁し、外骨君のやうに座禪でもやらうかね。」
雨軒居士は、例のしほれた中折帽を冠つて安下駄をカラカシ引きすりながら、後手を組んで三界無宿の浪人さいつた格好で歩いてゐる。

「東京なんかの郊外にはまた違つた風情がございますわね。」
妻君は、そのひよる長い体軀をくねらして、お上品に埃をは

ねながら歩く。何時も變なブルースを着て、臺所にくすぶつてゐる妻君は思へない。

鳴絃君が世話するこいふ家は、鎌倉驛に一寸遠いが土地柄としては申し分ない。家は南受けの中古の純日本建てで、周圍には低い土疊があり、其れに青草がいつぱい生えてゐる。門から立關口までS字形に砂利が敷き詰められ、其のすぐ左方は雜草、右手は裏庭に續く植込みになつてゐる。

「さうだ。外觀は僕の家より立派だらう。」
この家の管理を委任されてゐるこいふ近所の家から鍵を借つて來た鳴絃君はニコク笑ふ。

「生憎、主人が留守だつたがね。折角見に來たんだからこ譯を話して妻君から鍵だけ借つて家の中を見せて貰ふ事にしたよ。」

雨軒居士は四邊を見廻しながら
「ひびく荒れてるね。」

鳴絃君はすぐ立關の戸を開けて

「こにかく這入つて見やう。——奥さん、ささうぞ——。」
立關の右手が三疊、其の奥が六疊、座敷が八疊、其れに六疊ミ四疊半、女中部屋にも三疊が二間ある。これに二階がつく「オヤウ」。馬鹿にだゞつ廣いんだね。これは大家族向きだ。總勢二人の住家には廣過ぎる。」

雨軒居士は聊か呆れる。

「廣きは狭きを兼ねる。さうだ、氣に入つたらう。」

鳴絃君は頻りに吹きかける。

「廣いのも程度がある。外觀はそんなに見えませんがね。」

勝手口の方から裏へ出て見るミ、其處は廣い荒地になつてゐる。向ふはすぐに畑に續いてゐる。

「お洗濯物なご、こゝならよく乾きますわね。朝から夕方まで陽が射すやうでございませうから——。」

妻は、雑草の中をあちこち暫く歩いてゐたが突然

「ヒヤッ！」

と叫んで飛上る。

「何うしましたか？」

鳴絃君が近づくミ

「あ、あそこ！あそこ！——」

妻は顔色を變へて逃げ出す。指したあたりを覗いて見るミ草の中に大きな蛇がまぐろを巻いてヌツミ鎌首を立てゝゐる。

「や、青大將だ！」

鳴絃君も一寸驚いたらしい。雨軒居士は尻つぴり腰をして怖るゝ近づき

「蛇か！ミ、ミこだ！」

鳴絃君はステツキの先で突きながら

「なか／＼大きいよ。奥さんは肝を潰したらしいね——シツシツ、シツ！はい、——や、君の方へごよく／＼這つて行くよ。」

仰天した雨軒居士は飛びのく。鳴絃君は面口がつて、ステツキに蛇をひつかけ／＼

「殺すのも後氣持が悪いナ。や、また君の方へ行くぞ。」

蛇は、はね飛ばされる度に無氣味な其の白い腹をチラリ見

せるが、ミもするミ巧く逃げ出す。鳴絃君はフウ／＼肩で息を切つて、ステツキを振廻しながら四角八面雑草まで薙ぎ倒す。

「大丈夫でございませうか？」

勝手口の方の軒下から、妻君が蒼い顔して出て来る。

「は、やつミ逃げましたよ。」

鳴絃君は愉快さうに笑ふ。

「僕の長女はミても蛙が嫌ひだが、蛇を怖がらない。妙な子だよ。愚妻は奥さんと同じに蛇嫌ひでね。」

雨軒居士は煙草に火をつけて

「僕なんか、君ほごに勇敢になり得ないナ。ステツキで蛇をひつかける藝當は、なか／＼美事だつた。」

妻君はべつミ唾を吐いて

「さう／＼、何時でございましたか貞子が、ミミ子さんに蛇箱をつかまされて、大變に驚かされたさうでございませうよ。」

振返つた雨軒居士

「蛇箱？」

「或晩、ミミ子さんが何處さかで木の枝からぶら下つてゐる箱を拾つたんださうでございませうがね。開けて見るミ、縞蛇の標本みたいなものがいっぱい入れてあつたミかでございませう。持つて歸つて方々へ大切さうに持込んで、皆さんを驚かしてゐたさうで、貞子もまんま欺されたミかでフウ／＼言つて居つた事がございませう、私に似て蛇嫌ひでございませうからね。」

鳴絃君は笑ひながら

「はア、畫を描いてゐるあの何んミか華族の娘でせう。あり

やなか／＼愉快な女ですよ。」

雨軒居士はフイミ家の方を見返して

「さて、家だが——いゝ事はいゝね、第一安いかね。借家でこの位十分に建つた家は一寸無いだらう。有つてもこんなに安くは借れない。この家を借るさ——」

妻君は、雨軒居士の言葉を突きのけるやうに

「これから夏分になれば、蛇が出ませうね。」
鳴絃君は首をひねつて

「さア？やはり出るかも知れませんよ。何しろ田や畑を控へてますからね。」

「さうでございますわね。」

「なアに、出たつて何んでもありませんよ。茶腹君の家など蛇なんか珍らしくないさうで、時によるミ椽の柱に巻きついてゐたり、臺所の隅にぎぐるを巻いてゐたり——」

「まッ！」

「雞を」つてゐるので、其の卵を狙ふらしいんですが、茶腹君は蛇を見つけるミ、尻尾をつかんでほり出すんださうですさうかするミクル／＼ミ手首に巻きつかれる事があるさうですがね。この家は、茶腹君の家のやうな事はないでせう。だが、地理上油断は出来ませんね。」

鳴絃君が調子につて饒舌り散らすので、妻君はすつかり縮み上つて

「私、なんだか斯う——なほ、よく考へさして頂きまして、其の上で——」。

鳴絃君の話には餘程參つたミ見え、始めの意氣込みが無い。すつかり氣を腐らして了ふ。

「黙つてりやよかつたね。」

鳴絃君の方ががつかりして了つた。家の問題は、蛇の一件で至極呆氣なく片づけられた。

他に用事があるミかで、妻君は其の足で先に歸る事にしたが、雨軒居士は外骨君を訪ねる爲め後へ残る。

外骨君は、四、五ヶ月程前から稻村ヶ崎に引籠つてゐる。東京へは滅多に歸らない。

「妻子ミは當分別居ちゆう事にしこる。五月晒ていかん。」
六疊の間の床に、怪奇な格好の錆びた青銅製の大きな壺ミ並べて、蟲が喰つてボロ／＼になつた半身への木刻の佛像が二つ置いてある。其の前に珍奇な型の香爐を据えて香の煙が絶えず流れ出てゐる。外骨君は、銚色に變色した十徳のやうなものを着て、胸まで垂らした長い關羽髯をグイ／＼しごき、

赤塗りの經机にもたれて來客を睥睨したものだが、身長五足に足らず、頭はつんつるてんに禿けてゐる。

「毎日、梅干ミ味噌ばかり舐めちよる。其れに醒醐の妙味がある。精力は聊かも減退せん」

ぐつたりミ寢をべつた雨軒居士は頭を上げ

「悟つたもんだね。今様良寛になつたのもいゝだらうが、それちや君、家の方で困るだらう。」

「我輩が出ちよるミ、豚妻は悦んざる、我輩も其の方がえゝよ。娘を嫁入りさすやうな年になつて、夫婦別れも異なもんぢやで、結局別居がえゝぢやらうミ思ふ。」

胡座を組んだまゝ何かの本を見てゐた鳴絃君

「流石に違つたもんだナ。兩軒君、外骨博士は實にいい事を言ふよ。これやよく聞いて置く必要がある。」

「さうだね。——和尙はまた何うして奥さんご其んなに仲が悪いんだい。」

グイミ髻をしごいた外骨君

「我輩にも解らん。」

レオ子女史には持て餘してゐるらしい。

「獨りになるぢ呑氣でえ。この六疊の苦行林で坐禪も出るし、本も讀める、筆も十分運べる、講演にも行ける。」

ミ外骨君はカラシを笑つて

「この間は、鶴見の××寺で若い坊主ごもを集めて一タ、文藝講演をやつちやつた。題はシャクンタラー。」

鳴絃君はうつかり

「癪のたね？」

グツミ睨んだ外骨君

「黙らつしやい！ Sakunta といふんぢや。これは、サンスクリット語ミ方言ミで、韻文ミ散文ミを併用して書かれた有名な印度の古典劇ぢやよ。西紀四百年頃に、詩聖カーリダーサが、ドウシユヤンタ王ミ神女シャクンタラ姫ミの戀愛を取扱つて書いた一の史話劇で英國ではウヰリアム・ジョウンス獨逸ではゲーテやヘルデル等の禮讃を受け、歐洲劇壇にも上つた程の名作ぢや。作者カーリダーサは印度のシエクスピアミさへ言はれてゐる——ぢやが、ミにかく文藝講演なぞ油が乗らん。」

外骨君は、袋戸棚の中から黄色な日本紙に、毛筆で丹念に書

いた一綴りの原稿のやうなものを取出して經机の上に置く。

「今週の土曜日、本郷の佛教會館でまた講演をやる事になつちよる。今度、我輩の門下生の一人が、ならんでもえゝのにまた役にも立たん厚に士なりをつたで、其の記念講演會ちのう事ぢやよ。君等は、迎も聴きに來んぢやろご思ふから、當日の講演の概要を此處で紹介し置く。これが其の草稿ぢや。」

ペラリミ一枚めくつて、グイミ髻をしごき、扇子を膝に突つ立て、胸を張つた外骨君

「え、紹介は中途からにし置く——さて、教佛の文献資料たる一切藏經を、其の内容から排判するちゆうご、經、律、論の三藏ミなる。經ミはサンスクリットの素咀覽、即ち *Sūtra* の意譯で、この語源は線の義で、聖人の梵説がよく諸法を貫くこと恰も線の花臺を貫くが如くであるから、例へによつて名づけたものぢや。律ミは梵語の *Dharma* の意譯で、これを直譯するミ滅、または調伏ミなる。こは、佛陀が其の徒弟たる僧伽の教團の爲めに隨時に制定した戒律ぢや。」

突然、扇子で机の上をバンミ叩いて

「論の梵語は *Abhi Dharma* で、この阿毘達磨は直譯して勝法ミか對法ミかちゆうごことになる。論には、佛陀の説ミして見るべきものが無く、多くは後來の佛弟子の作で、經、律二藏を組織的に解釋した佛教哲學の意ぢや。」

外骨君は、こゝでまたバンミ机を叩き

「以上、三種の聖典を藏、即ち *Triśaka* と言ふが、この梵語の *Triśaka* といふ龍ちゆうの意味があるんぢや。龍の中によく美果を包藏するが如くに、三種の聖典の中には種々なる法寶を包藏するが故に、これを喩説して藏ミ意譯するんぢや。梵語では——」

鳴絃君は、煙草をくゆらしながら黙つて聞いてゐた

が不意に大聲で

「いや、驚いた。實に勝手な紹介だね。ま、折だから聴いてはおくが、其の梵語だけはもう勘辯してくれ給へ。」

外骨君は、扇子でパンミ机を叩いて

「さやうか。では残念ながら——」

「ついでに、其のパン／＼ミ机を叩くのも止めて貰ひたいね。耳障りでいかん何んたか講釋師みたいだよ。」

「さやうか。」

外骨君は、やゝ氣勢を殺がれた面持でグイミ長髯をしごき

「え——經律論の三藏は、小乗佛教にも大乘佛教にも同じくあるのである。小乗の三藏は概して傳統的ぢやが、大乘の方は創作的ぢや。で、これ等二流の三藏の内容は、かゝりに相違する。即ち、南方巴利系の佛教では小乗の三藏を有し、北方梵語系の佛教には大小二乗の三藏を有する。」

うつかりミ机をパンミ叩きかけたが、すぐに氣ついて扇子を膝に斜に構へ

「さて、從來の説では、十二因縁を佛陀の説いたものとしてゐるが、こは誤りぢや。佛陀以前に既にこの説を立てた宗教がある。この論據の證左として、いま暫く論じ上げる。」

鳴絃君は口の割れるやうな欠伸をして

「其れは省略さうな事に願ひたい。」

「さやうか。では残念ぢやが取り除く。さて、次には四分律に就て述べる。從來この律のこを、前後四回に分異する

が政に四分律と呼ぶことも言はれ、また其の内容が四部分から組織されざるから斯く言ふことも論じられるやうぢや。其の内容から見るちゆうさ一、讚禮文一、比丘具足戒、一三、比丘尼具足戒一四、受戒説戒、つまり僧伽の戒律生活に關する

一切の規定から成立してゐる。分集の方から見るちゆうさ

第一分比丘戒、第二分比丘尼戒、第三分、第四分には受戒説戒の一切の規定を收めざるから、要するに大体これ等四戒の分集が、四分律の内容組織となつてゐると思ふんぢや。さらに僧尼の日常生活に就て一切の規定を擧げざる波羅提木叉の南傳律ちゆうのは、以上の四分律とよく似てゐるが、こは西曆一八七三年から八三年までの間に於て、ドイツのオルデンベルグが五巻として出版し、次で英國のダヴィッツの共譯は、東方聖書第十三、第十七、第二十の三巻に編成されたる。」

外骨君は、續けさまに四、五枚卓稿をまくつて

「え——ミ、南傳律の註釋書として、また南北兩律の交渉關係として忘れてならんのは漢譯の善見律毘婆沙十八卷ぢや。この原典は巴利本で、西曆四四〇年頃に魔揭陀國の碩學西論佛師の中興巴利聖典の註釋家たるブツダゴサの著したもので、支那の齊の永明六年、即ち西曆四八九九年僧伽跋陀羅の譯するところ其の翻譯にあつては、漢譯の四分律を參考とした形跡がある。漢譯四分律の註釋書と誤る程その内容は酷似してゐる。然らば、南北兩傳の律が、漢譯によつて其の一。」

雨軒居士は、さつきに俯向き込んだまゝ、顔を上げないと思ふさ、スウ／＼駢をかいてゐる。鳴絃君はこれを見つけて

「オイ／＼外骨君！あれを見給へ。君が長談義をやるもんだから、雨軒居士は到々寝の國へ極樂往生してしまつたよ。あれぢやア一切は空だ。これ和尚如何！」

外骨君は難陀龍十の眼玉を剥いで、禪氣を含んだ大喝諸共ダダンミ平手で机を叩いて

「苦海林中の俗客！罪業居士！無二亦無三、靈山會上に向つて修せ！」

フラ／＼顔を上げた雨軒居士は、大きな唾を一つして

「ハツクシヨ！あゝ眠い。」

(つゞく)



川柳塔

ひ町・素琴・山緑・合議選

○ 松丘町二

よれくの上衣を吹き吹く風や
風走る處女の生毛で女學校の庭
「北東の風・曇」花のない花瓶が一つ
處女の乳房に寄す

ふごころで泳ぐ二匹のさかなよ
そぎまつた月一つある風の中
もの憂くも夏が居眠る葱坊主
貧しき日妻こ子が我を寂しがる
闇いふ詐欺師の腕にゐるをんな
さむくさ指のさきからのほる悔
寝ころんで空へ樂書してゐたり

○ 西田 艸樂

櫻から海への仲居隙が出来
意見して飯でも食へミ突つばなし
作業場のトタン屋根でバッチが乾いてる
同姓のこゝに立派な邸宅がある
立話男は襟を直さされる
追越して振かへられる人を連れ
アトリエもねぢ鉢巻で御勞作
營養價が全力を擧げてるストッキング
遂けてゐてまだ疑ひの晴れぬ戀
寶塚お針休みの氣が揃ひ

○ 橋本 綠 雨

山を降るにけんけ眞盛り
トラックが出た車庫の廣さかな
お玉 杓子憂鬱になる
博士博士博士ミ續くベツトなり
病室でうごかぬ雲をみるばかり
ベツトから見る横顔に灯がこもり
○ 朝田 新水
一日の暮れるもをかし飯を喰ひ
善人でありたい事の云ひそびれ
一等地なきゝ笑はす女給税

ダンサーの重い空氣に夜は更ける
月給の有難さこは晩の膳

松盛 琴人

○ 廊 二句

老莊の道も廊の灯につゞき
胡弓でも鳴りそな部屋のダブルベット
鮮人の内地に馴れて巻き脚絆
履歴書が六尺ゆたか係りの目

○ 岩崎 柳路

八方美人の顔にも見えるリットン卿
るいれきの跡もあります厚化粧
妻は親切ものだと思ふ水枕
就職の手蔓新聞欄を見る

◇ 水谷 鮎美

ブルジョアの後姿を見て暮し
鍵あれぎ最後のものは握らざり
肥臭い中を通つて養子来る
丸髻の結ひたて格氣してるなり
肩のこるこきをおほへた三十三

中山寺禮詣り (五月二十二日)

本堂でおむつをかへる健かさ
はら帯を納め十錢壽司を食べ

◇ 西村 明珠

慰めの言葉がうつる藥瓶
初夏の素足へふれる子の素足
敷居があつたま知らぬ請求書
襖をあければ主婦の魂
種痘さへつかぬすけない男なる
くつろいだ笹の背中へ子がもたれ

◇ 龜井 愚寵

獨り夜を歩くレールが光るなり
飾りてたゞ日めぐりがあるベット
いちご喰ふ女ありけり五月晝
痴情湧く夜の街は五月雨
ろくがつのお花島の体臭や

暗夫君へ 人間も音の一部さ大都會

◇ 片桐 靈壺

水色の戀なご吸うて寝るんだネ
憂鬱はデョッキの友をもてあまし
尼さんの方でもそれさなく笑ひ
ジャガ芋を三ミリにきる御手傳ひ
ポーナスがあつちを向いてくれ云ふ

◇ 喜多 春秋

バカバカミ大人にいうて腹が癒え
重役の疲れは椅子に沈んで居
眼を閉ぢてもう處女でない二十一
この頃はぎやミ外交員同志
一匹の南京虫にみんな起き

◇ 岩垣奇可愛

物思ひ犬は見上げて居てくれる
末吉の次に八郎九郎居る
つまるミこ奇縁ミやらの夫婦かも
毒婦の如き猫の寝ざまぞ
傲慢な顔に黒子が一つあり

◇ 中澤濁水

日曜の留守居雀を聞くばかり
長靴の洩にしみぐ梅雨を知り
騙しよいものゝ一つに男も居
官報に人の名ばかり繰る勤

◇ 日野華水

やうやくに座れた寄席の母であり
苔だけがよく育つてる植木鉢
かぶつてる人には似てる帽子なり
みつ豆へ二人のモガの氣が揃ひ

◇ 白井梅里

未知數を抱いて拳に眠る石
墓口が泣かうミ今日は香奠だ
金は皆他人の算盤だけはずき

◇ 市場没食子

結果から見て戯れの戀なりし
大阪は離れミもなしネオン燈
幸先を祝してくれる爛徳利

◇ 熊谷紅

鐵骨の錆止め赤く夜が更ける
フェルトの鼻緒が堅い交叉點
利殖法感心をして金がなし
呑み給ふ父満足の瞳にて

◇ 平井蒼太

古びたる羽織着て見む梅雨の宵
聖書ミ淫書われ双の掌に握りなむ
鼻柱の上の蚊

◇ 福田鶴峰

吸血の姿見てるて快ろよき
こッミ言ひく佛壇へ伏し
つらあての自殺遺書さへもせず

宴會に友の顔見えれば

松虫に君の座席があいてゝた

姫田 夕鐘

ぶく漬へ女給本當の顔でゐる
太陽の沈むへ俺は疲れきり
病んでからふさんは固いものぞ知り

◇ 吉田 水車

こゝも又カフェーになる板圍ひ
近日開業のまゝ店を閉め
交通が見れば怒るのかと思ひ

◇ 中西 おさむ

飛びおりた仔猫へ若葉揺れるなり
戀人の金齒が光る夏密柑
馬の顔五月の空は晴れわたり

◇ 木村 晃 卓

でも勤めなければ如何せん世帯
別府迄来て死ぬるのに首を吊り
弱音吐かぬも俺の戦術

◇ 妹尾 變人

慣れて仕舞へばハイ／＼さからわす
京都に言へば命日か三問はれ

◇ 生田 翠 夢

感激の強さに挨拶もつたり

献燈奉告祭に際して

粒々集

松山 前田 五健

偽りこそ訴りの顔美しく
誘はれたのを惚れたのにする歳
尖り切る受付へ疊む日傘
硬ばつた電話後らに何かあり
汽笛一聲驛員の知らぬ戀

御影 長崎 柳秀

さし芽した薇蓄をほゝえむ今日の父
誘惑をされさうもなし娘の化粧
飲みもせず遊びもせずにいゝ亭主

學友古武博士獨逸帝國自然科學學士院
會員に推薦せられたるを祝して

こつ國の譽をになふ今日の友
馬

東京 富士野 鞍馬

圓タクを覗けば脂こりて拭き
紙芝居あすを約して黄昏れる
隣室に算盤をきく温泉場
天照す樂土は六百八十里

曾我廼家五郎氏の「滿洲樂土の夢」
大連 大島 濤明

母の背に生活の苦の世を知らず
人間を買ふ金の名に線香代
證文を開けば債權者の味方

赤い鴉

前號「近作柳梅」より

岩 本 素 人

春風や人間共のニヒリズム 羅 門

は「春風や」よりも寧ろ「黒き日」に言ふ前書きを句の中へ入れては思ふニヒリズムを虚無主義に譯していゝかさうかは知らぬが、ニヒリズムに言ふ感じは黒き日の方が相應しく思はれるが、これはしかし私丈けの感じかも知れない。

妻の寝顔も馬に似て来た 重陽子
競馬狂の句であらうか私思ふが、句の上からでは一つぱりきりしない競馬に夢中になつて妻君の顔（寝顔であらう）までが馬に似て来た様に思ふと言ふユーモアな句。
むつかしき顔かな金庫開ける顔 夜 王
お金に對する人間の真剣味な馬鹿々々

しさを嘲笑つてゐる。皮肉がある可笑味がある。手馴れた句である。

獨身は自分の顔を見て笑ひ 鳴 玉

「尻をひつておかしくもない獨り者」の深列味はないが、この笑ひもまた淋しい笑ひであらう、若し作者が只の笑ひを詠つたのであれば平凡である。

樂書がふとしたくまかくれんぼ 秋無草

私共の少年時代にも覺へのある事だ。なつかしみのある川柳である。そして「ふこ」に言ふ語をうまく使つた句は割に少いが、此句の「ふこ」は甚だ適切に用ひられてゐるのは好い。かくれんぼの落書はまここ「ふこ」した出來心である。

轉りやもう一年も寝て居ます 暢 山

技巧で活かした句である。轉りやのやも「寝て居ます」に口語で結んだのも好ましい手法である。綠雨君の「折靴靴のかゞミがありません」を思ひ出す甘んじて居れば冷き眼に出合ひ 沐 天
世相は冷たい。「冷たき眼」こそ本心の色ではなかつたか。句としては今一つ推敲が足りない様だ。「居れば」は生硬

であり、「出合ひ」は蛇足の様である。三言つて悪い句ではない。

辨解の自分も少し悪く云ひ 八 步

辨解を一つするにもトリツクが必要なのである。あたまから辨解斗りしたのでは理が通らない。自分の落度も肯定して始めて辨解の眞實味が通るのである。そうした氣持を詠つたものであらうが。詩としての味は不充分である。

出動の影も辨當さげてゐる 鴉 天

辨當を下けてゐる姿のみじめさを誇張する爲に影を持つて來たのは成功である。朝の陽を背負つた自分の影が地上へ長く伸びてゐる。見ればその影坊主も貧しい姿で辨當を下けてゐる。佳句である。

炎々と防火ホスターに似て燃る 草 村

皮肉である。お役所仕事を嘲笑してゐる。辛辣であるべき句であるにもかゝらず今一つピンミ來ないのはさうしたものか。句の締め方が足りないのはなからうか。たこへば「炎々々……燃へる」なごの點も考へて見たい。はねかへす力沈黙もつてゐる 方 眠

句の意味もよく判る。取材も悪くはない。だが力強さが足りない様だ。「まもつてゐる」云ふ風な説明的な字句は斯う言つた柄の句にはなるべく省きたいものである。

梅田まで送り届けて来た足で 翠峯

誰を梅田まで送つたのか能く判らないまた送り届けた足で何所へ廻つたかもはつきりしない。だが梅田へ行つた用事、その足で行つた場所、この二つの行爲に矛盾があると言ふ事だけは肯ける。作者もそこを言はうとしたものに違ひはないが、梅田へ送つた人柄（妻君とか親とか兄弟とか）を暗示するか或は来た足で何所へ廻つたか。此二つの内一方の暗示に依つて今少し具体的な句の内容が示されてゐたらと思ふ。

セメントを呪つて蟻は殺された 有爲郎

文明の慘忍性、犠牲を要求する文明。文明に壓潰されてゆく階級 文明の自己撞着。辛辣な社會批判である。それを手輕るく川柳に取扱つた手並は敬服殺されるだけに舞臺へ立せられ 史緑

茲にも痛い皮肉がある。面白い取材であるが「立せられ」をせずに下五を何とか動的な文字を嵌めるか、作者の土觀を暗示するか、今少し複雑味が欲しいと思ふ。

四天王寺にて

親鸞聖人像雪空に突立ちぬ 一流

作者はあのかい、聖人の御像を見て何を感じたか。必ずそこには批判がなくはかなわぬ。雪空に只突つ立つたと言ふ丈けでは只見たまゝの事である。しか受取れない。また宗教的な感激も充分出てゐない。句とは別な話だが私もあの聖人像を觀た。そしてその俗悪さに驚いた。いや腹が立つた。あんなものを天王寺へ參詣する度に見なければならぬかと思つてがっかりした。何んでも篤信の奇特家の淨財で建てられたものだ云ふ事だが、悪い思ひ付きである。

鶉の咽喉をくすぐる鮎は晩の菜 呑空

鶉の咽喉をくすぐる鮎は實に巧な川柳的觀方である。全く、喰べもせぬ鮎、

鶉ののこから手が出てゐるが呑み込む事の出来ない魚。この鶉の氣持を「咽喉をくすぐる」を味んだのは感心である。だが塵五の晩の菜。菜。またまた極めて幼稚なもの。言ひ方ではないか。今一息練つてほしいと思ふ。惜しい氣がする。

聞く事があつて見ゆるインキ壺 柳村

「聞く事があつて見つめる煙草盆」に假りに下五を置き替へて見る句が年寄りぢみて来る。インキ壺は煙草盆では場所の違ふのは勿論であるが、年齢も違ふ。事件も従つて違つて来る。持つて来る小道具に由つて斯うも句柄が變るものか。一人で感心してゐる次第である。（昭和七、六、十七）

前號「句を拵んだ對話」中濁水君は大變な酒豪ぢやないか」とうっかり、込らしたら同氏から抗議が来た。曰く「酒は好きですが酒呑みで決してありません。三合を過ぎれば二日酔、五合を越すと三日酔疑ひなしといふところです。今後御訂正のこと」とある。依つて「酒豪」は取消

光耀抄

葎乃選

魚崎 吟女

暗示の極に千の夢聞いて居る
きつちり三日でなほるハシカ病み
お土産は母さちやんご知つて居る
若くして逝かれし友を思ふ

大阪 伊勢子

轉宅の夜

大阪 茂もよ

まだなれぬかに一人でございこもり
大掃除役立ちもせず逃げまはり
三十をこして着物の派手もいや

大阪 美律女

配り物中をのぞくも子供なり
虫干に母の人形が笑つて居
人形は正札つきのものをもち
大阪 清子

大阪 茂子

大阪 公子

子守唄傘を廻して足拍子
種痘場レヴューの様に腕ならべ
あゝやつと雨の日曜が暮りました
笑つても泣いても父は嬉しがり
子の着物縫ふのも主婦之友を出し

大阪 あざみ

物干はせまく五月の空は晴れ
床づれへ生の執着しのびより

登ヶ池 紅薦

さて次は何を食べようか迷ひ

けしの花たつた一日の生命なる

刀根山にて

大阪 壽枝女

見下せば口をかこうた人が行く
雀もう親子離れて餌を拾ひ

大阪 武子

お寝着が出てゐるまゝに夜が明ける
傘が行くもう五月雨の傘は行く

御飯蒸げし壺にして世帯じみ
子にもなり親にもなつて居るのなり

千日前今昔史 (一)

木村 半文 錢

(1) 序 言

先日、久し振に千日前を北から南へ歩いてみて、其の變遷の慌しいのに駭いたものだ。

と言つても筆者は五十に未だ五六年の間があるから、變遷を知つてゐるにしても可なり新しいことしか印象に遺つてゐない。眞に千日前の千日前たる觀物地帯の古めかしい事は、恐らく今日の古老でなければ記憶してゐまいと思はれる。然し筆者といへども三十年乃至三十五年位前までに溯つて記憶を喚起することは可能である。これは少年時代から千日前を歩くことが唯一の娯樂であつたから可なり頻繁に出入した結果にも因ると思ふ今、たゞくしい記憶の糸を手繰つてみて思ひ出すまゝに書いてみよう。

(2) 千日前の地理的展望

まづ千日前を地理的に一瞥してみよう。

普通に千日前と指稱してゐるのは北は道頓堀の角座と中座との中間、即ち昔の京與現在の角屋の東角から南へ一文字に、新金比羅様の前までに至る約三町内外の一區劃を言ふのだ。是は筆者の記憶する限り昔も今も同じ地帯で従つて土地の増減も移動もない。唯南北の直通道路は依然としてゐるが、東西の道路に多少の變動がある位だ。即ち第一に大きい異動は南地に大火以後に出現した現在の市電の東西線だ。あれは恐らく千日前の觀物地帯の大動脈を縦貫したもので、謂はば昔の千日前の特色を變革さす直接原因となつたであらう。と言ふのは千日前の千日前たる

る見世物本位の興行は、あの縦貫された地帯に多く存在してゐたからだ。

何と言つても百草湯から端を發した南地の大火は、千日前をして劃然と其の特殊性を二分した。最も斯く千日前の佛を急變せしめるには例の活動寫眞の洪水に見舞れる時代の運命も見免すことが出来ないが、然し、活動寫眞全盛期に拍車を加える契機となつたのは、矢張りあの大火であつたことは否めない。

何れにしても千日前の心臓たる位置に市電が進出するし、樂天地及び苦邊劇場の大きな建物のがさ張つて遂に見世物本位の、小さな席亭を全滅したのは遺憾至極である。斯くなる事が時代の力であらうけれども、南を向いても活動寫眞、北を向いても活動寫眞の現在に於ては、あつた千日前の舊見世物小屋が如何にも親し味をもつて、我等に呼びかけた時代を残り惜しいと思ふ。

それは兎に角、小便横町の綽名のあつた塀の側の暗い半町程の辻が無くなり、溝の側が擴張されて、新内や源氏節の定小屋のあつた細い露路が(常盤座北側)ひろげられて自動車がブウ〜と間斷なく駛走する道路となつた。

その外は道幅が倍大に擴張した位で、坂町筋も、芝居裏も、モシモシ屋筋も、妙見さん筋も、南海通りも舊態依然突である。殊に法善寺の狹隘なる通りも、竹林寺北横の道路も但しは榎木さんの細い辻も（現在東洋劇場の北横手）昔のまゝの道幅で、僅に舊千日前の俵をどめてゐるのは何ぼう心強いことであらうも知れぬ。

斯うして千日前としての地域は、今も昔もたいして移動はないが、ただ何となく淋しいのは、大火後に飛田へ移轉した張り見世の洞落であらう。牛竹（現在魚伊殿屋）の門から西を向くと直ぐ眼にちらついた軒行燈のあたりや、ぞめき歌を聲高らかに張り上げて潜る暖簾の樓名など、子供心にも今尙ほくつきりと印象に遺つてゐる。あの情緒が莫迦に千日前の氣分としつくり合致したものだつたと信ずるが、一方は飛田の一廓へ焼け出されて移轉し、残つた千日前がコンクリートと西洋音楽とに獨占された觀があるのは、何うしたものか、殊に、歌舞伎座、東洋劇場を始め、所謂資本主義の大興行本位が、今にも千日一帯を荒捲しようとしてゐる今日、筆者は千日前の新舊兩面の姿を對比してみ、喁つと思はず大きな息をもらした。

と言つて現在よりより以上に發展するであらうところの千日前一帯の資本主義化にケチをつける意志はこれつげかりも無いのだ。だが機械文明が齎らすところの味も、一緒くたに亡滅に導いて行く、其の資本力のパツコに尠くし肝の虫が觸れるだけなのだ。

恐らく千日前と道頓堀とのけぢめは、今に無くなるだらう。五座の櫓を背景とした道頓堀の估券も、千日前と見くびつた御安直な興行地帯と五十歩百歩の境域にまで追つて來たのだ。五座の櫓の下落が、千日前の進出かそれを批評するのは、本稿の目的ではないが然しさうした差別撤回が、目前に迫つて居ることだけは否定できない。若し成駒屋御大が歌舞伎座の舞臺を踏むことが實現したとすれば、十年前の千日前を知る者にとつては、それが想像の範圍でないことを見出すであらう。殊に二十年、三十年の昔の千日前を記憶する者にあつては、夢にも見られぬ異常な出來事であるに相違ない。と言うのは現在歌舞伎座の建築されてゐる地帯は、二三十年前には海女の水中飛込みのエロ味や、地獄極樂の生き人形のグロ味や、さては劍舞、江洲音頭、敷け、生れましたは北海道——の畸形

兒等、の所謂低級、安價な見世物式興行地帯であつたからだ。この木戸橋は見てのお歸り式の興行地帯へ、あの大阪人に特異の尊敬を拂はすところの鷹治郎成駒屋丈が、水銀をコナカラほご嚙んだ鑄聲を、放散しようとは豈に夫れお釋迦さまだつて想像することは出來、マヘンヤオマヘンか——だ。

途上説く者あり曰く、萬歳が五座の舞臺にのぼる今日、成駒屋が千日前に出演したとて不思議なことはない、と。

成るほど否定の否定は、肯定を生み、直線の延長は圓形を宿し、極端の極端は萬歳と成駒屋とが新陳代謝し、斯くて千日前は資本主義を擁して階級組織を完全にアウ、ブーベンしたことになるう。

何と、やゝこしい原理に起つ千日前の變遷よ。(續く)

誤記問答

去る人、さる方面へ手紙を出したるに、數日を経て届ける返書に曰く「小生の名前は斷じて羊太郎に非ずして、洋太郎なり。信せざらば市の戸籍簿につき見るべし」

去る人、憤然として返書に曰く「我いまだ嘗て戸籍吏たりし事なし。戸惑ふ勿れ」

手紙でさへこれだ。校正恐るべし、とは校正室に於る某君の實話をそのまゝ



一 路 集

(募 集 句)

皺

福田山雨樓選

聞いて来て心配をする母の皺
 皺寄つた袴を代書ひまに見る
 淋しさは脊中の龍に皺がいり
 蒸したオル床屏は皺の顎へあて
 福相は笑顔をつくる皺の線
 保険金満期こなつた顔の皺
 皺も亦寄りますやろこ世帯じみ
 渡橋式皺苦茶二人晴れに立ち
 水髪斗つるく紋付の皺
 半生をまかせた皺のいこしやな
 大空へなんぞ冷たい山の皺
 入墨に皺が寄つてる薬風呂
 オペラグラスへ名優の皺
 宴會で急に氣になる顔の皺
 仲人の袴の皺へ笑えない
 白粉をまきつゝ薄い皺を見る
 すましてる人絹かなしも裾の皺
 大晦日大きい皺が一つふえ
 迷惑はかけて居ませぬ皺ズボン
 人絹の皺を怖れて立つてる娘

春 秋
 たし 路
 虹 一
 今 雨
 白 花 子
 三 碧
 曲 豆
 鯉 友
 錦 石
 民 郎
 南 面 子
 小 松 園
 水 車
 華 江
 素 月
 富 美 三
 茂 代
 河 烏 流
 青 兒
 富 士 雄

水囊へ額の皺が目立つなり
 頼りなく臍皺よせて春を病み
 アイロンへ皺は素直にのびて
 皺くちやの切符を出して疑
 本家の對策へ皺々が寄り
 鴈沼郎素顔はつきり皺を見せ
 珍客に會へば止後の皺がふえ
 皺の手をながめて男氣うせ行く
 皺くちやの顔で妓の手を握り
 勿体なや十圓紙幣の皺だらけ
 剛輕は年を取らない皺を寄せ
 烙鏝へふき出さず顔の皺
 ふこ顔の皺が映つた大寫し
 皺枯れた聲で親への觀世流
 白粉を皺に残して陽に恥ぢる
 妻の皺ふき晩酌によく目立ち
 妾見の皺は己れを感じさせ
 朝寝して皺の着物が枕許
 指先の皺で長湯の汗を撫で
 綴帳の皺に幕引身をひそめ

裸 人
 葉 兒
 英 賀 夫
 同
 永 樂
 同
 明 珠
 同
 し じ
 同
 孤 鶴
 同
 紅
 同
 耕 民
 同
 沐 天
 同
 吐 句 坊

▼六月九日の夕方まで社の事務所ですいつも
 の様に痛む盲腸を押へながら社務を處理し
 てゐた縁雨さんは電話一つで早速其の晩阪
 大病院に入院された十四日の午後外科醫長
 岩永博士執刀のもとに豫てより悪かつた盲
 腸切開手術を受け、今は其の病院中央館三階
 廿八號室のベットに靜養中でありました。入院
 した日から長崎柳秀博士を初め井上博士尾
 崎先生、布施先生、庶務の阪口課長其の他の
 諸先生が殆んど毎日のやうに、病める柳友縁
 雨を訪ねられてゐます。

▼また一方には路郎先生や山雨樓、琴人、町
 二、杏三、雅幽、豆秋、水車、夕鐘の諸氏
 其の他澤山の人々がひつきりなして、其の病
 室を見舞つてゐます。こんな具合で當の本人
 は、毎日多くの川柳家に會へるので、少しも
 病院に居る氣持ちなごせず、大變元氣が冴い
 手術後の経過も非常に良好で、彼の帝大腫
 外科で濱口元首相の手術の際、やかましく
 たと同じ、天斯も出たとて大笑ひ。縁雨君の
 入院のために一番支障を來たすのは社務で
 社へかゝつて來る電話やら、毎日各地から寄
 せられる數十通の通信に早速返信其の他の
 處理が出来ず滞るので、自然それ等の方々
 お氣の毒に思つてゐます。若し御照會などの



町之西
 MEMO
 生峰鶴

縁雨さんが病氣の爲め、私が代理をいたしました。
 不行届の點は遅しからず御寛を乞ふ。

向ふ傷皸の中にもはつきりこ
 高慢を小鼻の上の皸に見せ
 老僧の皸深々ミ親しまれ
 パノラマの皸の高さへ灯が點り
 薄給のズボンの皸を敷いて寝る
 皸よつた人の意見が有難し
 ポーナスの百圓紙幣に皸がなし
 恢復期牛乳の皸氣にいらす
 お鏡の皸へ煽ぐ手フト止り
 身も魂も捧げつくした皸ぞ知れ
 皸或日美顔術師の手にかゝり
 餅の皸四月の皸が生えてゐる
 下戸ミ云ふ額の皸も親まれ
 皸一つ二つ 清書は甲の上
 封筒の皸を氣にして妻はあけ
 灯が點り皸になつてるプログラム
 帆が皸になつて船頭飯を喰ひ
 ハンカチの皸を伸しして口答へ
 バラシユート地球へ下りて皸
 唐紙の皸へ靜かな蠅一つ
 (客皸のない紙幣を拐帯持て餘し) 同
 評 定石のやうな川柳、想が古いと云ふ難
 はあると思ふが、このユーモアは捨て難
 い。革又氏の句と對照して見ると更に面
 白い。

同 黒子々皸の間で踊りされ 没良子
 評 頭の中で、想像で描き出されさうな句
 である。しかし偶然こう云ふ實感に觸れ
 て思はず微笑を覺えたとも見ても不自然さ
 はない。川柳の繊細さを、剛逸さを巧み

鴉天

同 八歩

同 秀樹

同 革刃

同 瑞穂

同 没食

同 白柳

同 白丘土

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

に表はしてある。
 (同)かみそりへ日向の母。顔の皸 裸人
 評 子供の月代を當つてゐるのであらう。
 田舎なごでよく見る圖だ。月代のいつち
 嫌ひであつた僕は幼時が、そやる偲ばれて
 ならない。僕が以前もした「剃刀の眞
 上で母のとがる聲」に比べるとこの句は
 遙かに軸の太い感じがする。

(同)蔭口の最中へぬつこ皸の顔 菊路
 評 こんなひよんなことが往々あるもので
 ある。川柳家にはありふれてゐると云ふか
 も知れない。けれども、蔭口も蔭口によ
 りけりてこんな句の場合は後に先にも
 動きが取れない。熱湯が散りかゝつたや
 うなほてりを覺えるであらう。滑稽を通
 り越してゆがんだユーモアの迫る句。

(同)父の皸母の皸より深きかな 草村
 評 事もなげに詠つてゐるやうであるが、
 選著の深味がある句だ。僕の両親は共に
 還暦、僕もこう詠つて見たい氣持ちにそ
 うられる。この句の境地は最早詠嘆とも
 感傷とも希念ともわかぬ、ひろくとした
 敬愛の心持ちから生れたものであらう

(人)顔の皸母はごりわけ苦勞性 方眠
 評 「ごりわけ苦勞性」とは何と云ふ巧い言
 葉であらう。しかしこの言葉は巧いから
 い、と云ふのではない。その巧さを包ん
 でゐる純な澄んだ心持ちが、たまらなく
 引付けるのである。斯う云ふ氣持は川柳
 家ならずとも誰でも持つてゐる。けれど
 もこれだけに言ひ表はすことは川柳家で

裸人

菊路

草村

方眠

回答が遅くなつた向きがありました。ごう
 ぞあしからず御諒承願ひたい。何れ此の雜誌
 が刷り上がる頃には退院が出来ることになつ
 てゐますから退院したら、ポツ／＼山積して
 ゐる事務をかたづけける事が出来ると思ひま
 す。

▼そして縁雨さんから「態々お見舞に訪れて
 下さつた方々や、お手紙を頂いた皆さんに、
 よろしく御禮を申上げて呉れ」との事であり
 ましたから、茲にお傳へ致します。

▼嵯峨の平岩司郎氏へ、今社友として入社
 された今後の活躍を祈ります。

▼本社の劍刊百號を記念する爲め、京都支部
 では六月四日夜、川柳街社並びに本社の後援
 の下に昭和圖書館で、加茂川川會を催し幹事
 京郎君の挨拶に路郎先生の有益なる講演が
 あり、會する者約八十名誠に盛會でありまし
 た。當夜は川柳街社の布部幸男氏や澤田佐一
 郎氏嵯峨の平岩司郎氏等に、種々御盡力に預
 かつた事を茲に御禮申し上げます。本社からは
 當夜路郎先生、山雨樓、縁雨、琴人、新水、
 里十九、艸樂、觀月、鮎美、水車、などの諸
 氏と私が出席しました。

▼梅田支部幹事 川村觀月君は今度都合で同
 人永田里十九君と交替される事になりました。
 た、新幹事の活躍を祈ります。

▼釜ヶ池支部は、六月十二日例会を開き本社
 からにはかほる、鮎美の兩氏が出席されまし
 た。

▼撫順の同人岩崎柳路君は、六月四日滿洲奧
 地の西安と云ふ所へ旅行中だとして、其のたよ
 りに六里程先きの落務所に暴動起り、馬賊
 と共同で當地へ来たので一寸驚いた、居留民
 は公安隊へ逃げ込んで無事なるを得ました。

なくては容易に出来るものではない。川柳家は普通人の倍も三倍ものを感じてゐるのである。

(地) 白粉が靴を喰 込チンドン屋 葉光
評 皺を材題にした集句中の句が一番深刻なものゝ詠つてゐるやうに思ふ。中七の表現が聊か誇張に近い感じがしないでもないし。斯るテーマは既に新鮮でないと思ひ得るかも知れない。けれども街の砂埃りを浴びた行路道化師の疲れた姿を捉え來つて、斯くも痛烈に辛刺に川柳家のメスを揮つてあることには感服する。

階段

新水選

階段でまだ寝ぬ父の咳を聞く 耕郎
階段へバラッル春の色を見せ 黒大子
掛聲の程に 階段上られず 世都象
階段で老ひたる腰の 一休み 白花子
スリッパで行く階段(三味が鳴) 裸人
階段をあぶなく子供抱いて降り 虹一
階段のこんな所にあつたピン 柳村
發車ベル下りる階段もさかしく 水車
階段を降りる早さも給仕なり 日出樹
階段で待ち呆けらしい人を見る 永樂
階段の廣さ女の臭ひする 白柳子
靴音に子は階段の數をよみ 享史
階段のこゝろをのほれば海が見え 方眠
階段の上に守則が貼つてあり 没食子
階段へ造花の散つた春景色 素月

(天) 腕自慢干した大根のやうになり 巴人
評 古句の「母の名が父のかひになしなびてゐる」程の複雑さと情味とは持たない。しかしこの句は川柳の妙味に迄迫つてゐる。それは單に譬喩のうまさとか着想のめづらしさとか云ふものから更に一步進んだ人生批判の圍内へ踏み込んでゐるからである。句が人生を物語つてゐるからである。それでゐて滑稽味の容捨なく發散してゐる句だ。

(軸) 十字架の額の皺は深かりき 山雨樓

朝田新水共選
中島鐵洲

タラップ(恐はく)降りバスケット 紅
威勢よく階段上る月給日 菊路
階段の途中で聞く客の聲 小松園
よくぬぐ靴階段は光つてる 司郎
階段に彼の人らしい音を聞き 河馬流
一段で今日の挨拶考へる 青兒
段梯子馬鹿けた戀を聞きながら 沐天
階段で女將幹事に何か詫び 白丘土
階段に息つく年のさびしさよ 錦石
階段の試験々々にやせ細り 春秋
高知線土産をさけて降りてくる 幸村
階段の今日も嫌な音がする 蝸牛
階段の際で二階の人を呼びひこし 民郎
代表を待つ階段へ氣が尖り 掉二
階段で下女いひわけを思ひ出し 八歩
階段の呼ばれたところ立ちあす

が公安隊長も縣知事も逃げてしまつたので閉口したとの事。

▼社友熊谷紅君は六月十四日信州へ行かれて次の句を寄せられました。(富嶽多雲二天人は待てど暮らせど降りて來ず)「村人に聞

涼味溢るる
ルービヒサア
清涼飲料 ンロトシンボリ
宮内省御用達
大日本酒株式會社

けば門まで來て呉れる」
▼清水虚白君は五月二十二日岐阜養老の方へ旅行されて「ちとらむ呑めば矢張りたゝの水」の句を寄せられました。
▲本號の編輯は路郎先生、山雨樓、町二、琴

酔つてゐる貌へ階段肩を貸し
 階段でまこふ素足の春の裾
 生返事して階段を降りる音
 階段の数を忘れた首を上け
 階段で給仕の嘘は出来上り
 階段で辛俵をする涙ふき

佳句
 階段で行き交ふ顔を見つめられ
 自惚れてゐる階段を踏みはづし
 階段を二段に上る忘れもの
 スバイの眼耳階段を静かなり
 階段を手ぶらで降りる物思ひ

(軸) 階段の掃除日嫁さきも云々
 (同) 學力の程度階段での思ひ

鐵洲
 階段になつてバソル杖になり
 階段の殿受けた團隊旗
 階段を昇る遍路に櫻散る
 階段になつて先達黙り込み
 以上は石段又は「きざし」と云ふ可きか
 きざ、しゝ寄附を讀み上つめ
 階で人せなむコンバクト
 仲のよい二人階段に立ちまわり
 吉報を手に階段のまごかしく
 階段のいつち眞上で孫の聲
 子を連れて階段一二三降り
 學生に二階を借せた昇り降り
 階段の上に守則が貼つてあり
 階段の足音舎監長さ知り
 階段を降りた處にW O

たし路
 葉光
 孤鶴
 柳天
 明次
 明珠
 叶句坊
 明珠
 今雨
 司郎
 葉光
 新水
 選同
 黑天子
 紅柳
 一水
 柳車
 湖山
 スエノ
 機見女
 紫雲
 美津女
 方眠
 耕民
 没食子
 青兒
 叶句坊

階段へ今歸つてく音をたて菊
 階段へ仲居の一人體に來る雨
 階段を鼻頂で來る程の仲棹二
 階段へ迄は知つてた二日酔耕
 階段を仲居器用な音で來る享
 二ツ宛階段上がる期かさ憲
 階段をチト危がる父兄會幸
 階段を昇ればうつる大鏡白
 この家の生活を見せた段梯子
 階段の下へ空瓶並べられ
 階段の上の暮しに子が五人
 階段の下で幹事のもめて居る
 階段を降りる早さも給仕なり
 階段に思つぐ年の淋い事錦
 階段はあきらめて來た足の音
 階段の埃塵が散つて朝の部屋
 絨氈のある階段の踏みまこ
 階段の通下三等の人いきれ
 階段へ無理をさせてる喫茶店
 階段のこんな處にあつたピン
 選に就いて
 石段、階段、階級と三様に作句されて居ま
 した階級の意が昇降する爲に作られた物と
 すれば階級階梯と云つた方は一寸縁が遠く
 なる階級となると屋内のものに響くさうし
 て段梯子を主として作句されたものが妥當
 ではあるまいかと思ふ。しかし課題は作句の
 便法とすればさうやましく云はつとも佳
 一句を頂く方がよいと思ひました。それで一
 句句式に頂いて更に同想の句は代表的の句
 を發表しました。

鐵洲
 菊路
 雨二
 棹明
 享史
 憲坊
 幸村
 白土
 鏡子
 大鏡
 父兄
 危がる
 期かさ
 二日酔
 程の仲
 一人體
 今歸つ
 音をた
 菊雨

柳次
 秀樹
 錦石
 郎球
 明郎
 司郎
 瑞穂
 草及
 柳村
 柳素
 茶店
 喫茶
 人いき
 踏みま
 朝の部
 散つて
 埃塵の
 階段は
 思つぐ
 淋い事
 早さも
 降りる
 幹事も
 下で

人、杏三の諸氏と私もお邪魔して本社事務所
 で致しました。
 ▼川柳雜誌一〇〇號を記念する爲め本社並
 に京都支部でも記念句會を開かれた際、記念
 として特に合本一冊宛(一圓五十錢)で發賣す
 るもの(を贈呈した所が、當日出席されなかつた
 方で右の合本を會費を出すから分けて呉れさ
 言つて來た人が多數ありました。けれども遺感
 ながら全部お断り致しました。特に御希望の方
 は本社事務所へ一圓五十錢と送料廿二錢を送
 附されれば御送本致します。

轉居

▼井上劍花坊氏(東京市外野方町上沼袋一七一〇)
 ▼鳥谷伊勢子さん(大阪市北區澤上江町五丁目三九山口タメ方へ)

新誌友

(七年六月廿七日まで)

「川柳雜誌」前金半年分壹圓八十錢以上拂込
 の讀者を誌友として、こゝに芳名を掲載致し
 ます。何卒新讀者を御勧誘下される様御願ひ
 申します。御紹介下される方には川柳雜誌の
 近刊を見本として差上げますからお申込み
 下さい。(綠雨)

高久敬三(福田山雨樓) 田中孝三(關本雅幽)
 増喜三丸(永田里十九) 岡下吉松(橋本綠雨)
 鷺田南耕、小林正義、大國青柿、片山雲雀、
 有澤鐵吉、松本虛聲、橋本源悅、荒田練屋丁
 今川喜一郎、西垣武彦、北澤製裝雄、辻真一
 伊藤喜一郎、奥六造、中村幸七、中西久郎、
 勝山齊、吉田寅介、奥村達三郎(本社事務所)
 括弧内は紹介者



「寶の帖」漫興

蛭子魔十窟

四

外人は、日本を松の國といふ。

敢て外人の觀察をまつ迄もなく、私共の親しい文學は、私共の名所古蹟は、多くの日本の松を物語つて居る。だから、無論その松には、いろ／＼ある。——こんな話をきく。

兵庫縣下尾上村、縣道の真中に、一本の大きな松がある。觸つた者は、松の神に崇られる傳へがある。或日自動車の運轉手が、何にも知らずに、その松に放尿した。そして翌日ドライブして來ると、俄に眠くなつて、松に正面衝突をした慘事がある。

この松の神は神の屠た。この松も亦松の屠の一つだ。

(51) 物見の松は松の松屠

松の國の数多き松には、層の松にも豊かな傳説が宿る。「伊勢の朝熊より、二見の往來東にあたりたる山の上に、伊勢三郎が海賊た

りし時の、物見の松とて、今はしんげかり枯

残りてみゆ。其高さ三間許りもあるべしとぞ

扱また美濃の赤坂にも、熊坂が物見し松とて

名づけたるあり。されば昔の盜賊は、かやう

に喬木の上にあがり居て、往きかふ旅人なん

ご伺ひ見しや、いかにも古風の盜人姿、おも

ひやられおかし。彼の伊勢三郎は、熊坂同時

なれば、伊勢、表濃國も近し。同類たるべし。

されど伊勢三郎義盛は、義經の長臣となり、

其志を改るに至りては、天地隔絶たり。しか

はあれど義盛忠臣の聞へはありながら、斯る

悪名千載に残る。假初にも悪しき事は、すま

じき事の龜鑑なるべし」(理齋隨筆)。流石に

志賀理齋の穩かな興味深い筆致である。

熊坂は松の上からひよぐつてゐ(古川柳)

物見の松に長刀の古草履 (同)

又手、十四字詩で「物見の松は松の松屠」と

松の字が三つ疊むである。これを重詞といつて、昔は、かなり流行し喜ばれた傾向が窺れる。彼の夜雪庵金羅は好みであつたのか

ちよき々々と漕筑地猪牙堀の猪牙

雪と雪重る雪は不二の雪

馬と馬駈追ひ鞍のくらべ馬

樞の木の棒もちの木の辻かため

伊達者の伊達は伊達にせぬ伊達

酒樽に新川の蠅牛の蠅

葬へ出る朝顔の素顔にて

竹と竹競る竹の一月寺

水の中行水舟の水

疊屋の疊かぞへて疊算

蝶と蝶禿と禿行あたり

豊葦原かよし原を産む

狐なくよりましら鳴く聲

この種の作を求むれば、いくらもある。

新川の蠅牛の蠅とか、蝶と蝶、禿と禿などは、好み(アマツズノント)として、微笑し得る底のもの、竹と竹に到つては狂句域に歩を運ばむとして居る。

てとてとてとてひきつれて上總(こぞ)

(古川柳)

「山王の櫻に猿が三下り、合の手と手と手々と手と手と」孟子注に、天下者天下之天下、非一人之私有故也などある。重詞に就ては、曾て本誌に寸言した事もあるから、茲には多くを陳べぬ。彼の「八雲たつ出雲八重垣妻ごめに、八重垣作るその八重垣を」は、日本人にして知らぬものはない。私は

舊正月に支那人が死ぬ死め上海

と時事を吟じた。無論意識的に重ねたと同時に、かくせればエンハアサイズする事の目的が達せられぬからだ。そこで私は摩耶火君の「言語遊戯考」を諸氏の机邊にお勧めする。その中に疊語學韻の例が、夥多挙げられ

月月に見る月は多けれど月見る月は

此の月の月

月々に月見る月は下女安堵(柳樽三七)など、有益な研究發表がある。

將來、私共の新しい川柳詩の上に、日本語の遊戯興味をどう轉用し活用するかは、唯

嚼してからの心得である。何んでも食はず嫌ひは悪い。

「寶の帖」には京師關係の作が非常に多い。

(52)ひら〜と春の扇の東山

(53)揚屋の屋根に京の落日

(54)夏草も泪の種の鳥邊山

(55)下京は柳さくらを綾にみて

(56)耳のある壁を嫌ふて蝶蛾の奥

(57)五條あたりは手も付ぬ雪

(58)比叡に育つて氣の強い兒

(59)西陣も佛閣ほとに案内して

(60)翌日は立ふといふて居る京

(61)木屋町深く假りに居にけり

(62)落中の除夜は火繩の星明り

(63)京の目貫は金銀の寺

貞享三月紀州和佐臺八郎の、總矢一萬三千五十三、通矢八千百三十三は、三十三間堂の射術の譽である。

(64)雨の日は的の星かく頭痛山

「抑後白河法皇は常に頭痛の御惱ましまして、醫療さまざまなりしかども其驗更になし……法皇の前生は熊野にあつて蓮華坊といふ人なり、海内を行脚して佛道を修行す、其勳功によつて今帝位に昇れり、されど前生の禍穢いまだ朽すして、岩田河の水底にあり、

其頭より柳の樹貫て生る、風の吹毎に動搖す則今身に響て此惱をなせり、念ぎかの頭を取上なば苦惱を免るべし」これ蓮華王院頭痛山縁起である。

御頭痛の柳は京の小鬘先(古川柳)

これらの中で、そう佳吟なりと指示するものもない、換言すれば刺戟が乏しいのである

(65)鞠も蹴る下立賣の藥廬

(66)通へ鞠の翦る藏前

この二句は對比して一種の妙趣を覺える。

(67)翠丸ちいむ木曾の雪隠

句釋は略そう。曾て翠丸を材料にしたとて某氏間に紛擾々惹起した事を思ふて、微苦笑に堪えぬ。肩斧日録初篇の如きには

旭のわたる拙の翠丸

橋から笑ふ船の翠丸

翠丸に日の當る曲水

疑ひ晴れて伸る翠丸

放れた馬のゆれる翠丸

我翠丸を披す埋火

など、かなり詠みこなし得る存在である。が、斯く月々夥しく發行される柳詩の課題に未だ「翠丸」なるものを見出さない。茲に私は翠丸テストを提案して置こう。(四月四日稿)

催促へ團扇は輕う／＼動き
生活へ團扇の腰も折れてゐる
絹張の團扇へ熱うかしまり
面白い話團扇の首がとれ
坊さうの後に動く大團扇
れむさうに動く團扇へ子供泣き
幕合ひの團扇の波が目立つなり
さなの子も團扇を持てる戎橋
挨拶は後とうちわを先づ出され
晩酌へ團扇ゆつくり動くなり

川柳雜誌社
京都支部 加茂川句會

於昭和圖書館

六月四日

本社は先に百號記念事業の數々を舉行し、大成功を納め、其餘勢を青葉涼しき京洛へ進出し、本社京都支部主催加茂川句會を催せし處、川柳街を始め京の各柳社の聲援ありて、之又近來稀にみる大盛會にて路郎主幹の「川柳の脈膊」と題する講演あり、無事會を閉じ、尙當夜の出席者全部に川柳雜誌の合本を特に贈呈した。

(出席者) 路郎先生、左一郎、波樓、乃ノ字蒼太、綠雨、鶴峯、水車、司郎、變人、裕介、長春、千春、富美三、京郎、迷張、秋生、金波、都鳥、梅若、幸男、泥鈴、黃子朗、自然兒、新水、欵乃、木公、鮎美、まさる、紫水、柳一、柳次、梅香、草村、光風、清月、里十九、無冠王、學人、源一、孝一郎、正平、草舟、松窓、不幸、はづみ、好浪、木羊、京二、濱瀾、昭三、櫻月、可仙、愚人、流石、山雨樓、晃洲、紅壽郎、南枝、潮吉、勝堂

草史、蜂郎、甫三、豊次、啓秀、蛙里、白扇
陸平、泰典、紳樂、修造、折草、福造、舜二
兼題 夜 琴 人選

フェルトの步調涼しい初夏の夜
夜なべする女房の前に相場欄
あれを思ひこれを思ふて午前四時
カーテンへ夜の空氣が險惡な
汽車辨を淋しく聞く夜の旅
夜、マダム、益々若やぎて
横町の闇を思案の妻、別れ
チャルメラへ歸宅待つ妻の底
酒を呑み乍らだん／＼夜がしろみ
結婚の夢の一夜がしらむなり
おう夜だ屋根裏にも人の息
ひつそりと叱られる夜の雨の音
白粉で嘘をかくしたホオンの灯
カフエーへ行かればなぬ夜が来る
肩並べ噂の主に、遇ふ夜店
飲み明そう語り明そう猪口を差し
夜の静けさへ水道がボタリボタリ
灯を消して孤獨の夜をじつと居る
夜の部に鮮人夫婦白くある
ステツキにペーパーメントの夜の
夜へ出る戀があらふとあるまいか
得心で嫁いだものゝこわい夜
今迄の覺悟捨てさす夜となり
約束のある夜へ故郷の母が來る
こそばゆく／＼手を握り返す夜ぞ
驅け落のヘッドライトに見透か
夜になつたのに小兒等が歸へら
母一人夜風を叱る窓を閉め

人選
波
柳一
里十九
秋生
梅若
草村
木公
勝堂
草史
啓秀
峰郎
清月
紫水
光風
乃の字
裕介
紳樂
左一郎
木羊
迷帳
豊次
不幸
波樓
蛙里
無冠王
修造
好浪
紅壽郎

雨の夜母の手紙を讀み直し
さて今日の弱きを夜具の中で悔ひ
お通夜の末子は父の膝枕
セコンドと猫のいびきと淋しい夜
夜の底返へれば鳴る水枕
靴の底裏の濕りの家を出る
(佳)夜が更ける程胎動に泣く涙
(同)夜が來て夜鳴はとどろ足袋を
(同)月光に溜息返すことが出来
(同)腹掛けの夜を醉ふてる金の音
(同)淋しさは夜の行半と國を去る
(同)さびしくも父の眼鏡のおたの夜
(同)夜の街よるめく足も姿なり
(同)酒の息夜半の家へ戻つたり
(同)天井へ同じ不幸の夜をみつめ
(同)内縁の妻と夜汽車で國へ立ち
(同)今夜も行くのかと額の母見
(同)月給も忘れて夜の子と座り
(同)獨り者むさぼる如く夜を行く
(同)加茂川の夜撈帯へ静かすぎ
(同)副業の脊の丸さに灯がともり
(同)本當が言へず星の夜を別れ
(同)針仕事夫が遅い夜のの色

兼題 山 幸

山登りプラン程にもはかざらず
ケイブルが今行々遠ユリユクサツク
山からのつまらぬ草を大事がり
山彦へ言ひ出す言葉直ぐに出ず
來ぬ背をけいブルカーの灯が曇り
山彦に逆ふて見ふリユクサツク
山越へて去ぬ山信心の灯がともり

黃子郎
山雨樓
柳次
可仙
櫻月
幸男
南枝
好浪
波樓
修造
新水
鮎美
紅壽郎
草村
幸男
黃子朗
裕介
山雨樓
水車
木羊
柳次
琴人
同
男選
不幸
豐次
草舟
波樓
無冠王
晃洲
鮎美

國難へ頑張つて居る富士山
 飛影の村に嬉しく山の色
 飛行船中のゆつくりまたくなり
 登山服中の蚤をもてあまし
 山びこが鳴るとも一度云ふて見る
 大衆へ山と盛られた夢菓帽
 ソフアアに山近いなり近い也
 故郷の山へ無言の窓を明け
 夕焼の山赤々と賣られ行く
 山彦と別に獵銃二ツ鳴り
 絶頂へハンケチ古く残つて居
 山からの便り萬古く薄過ぎる
 登山靴富士なんかもう馬鹿にする
 明日禁じる山を眺めて足相撲
 一つの世の人がつけたか山の道
 山開き残んの雪をなめて来る
 犬連れて口笛で来た。晝の山
 鏡臺の中に山ある温泉場
 意地悪な子が富士山にけつまづき
 ウキンドの山に雪あり登山器具
 直向に山ある京の交叉點
 廻り舞臺バックの山を引きちぎり
 ふるさとの山へのぼつた夏休み
 テカシヨが問伸びにちたき坂
 山彦へ向ふも鐵砲打つた様
 ふるさとは山の影なり訪問機
 望遠鏡のぞけ山に誰も居ず
 頂上の風に帯皮ゆるめられ
 山賣つた金で學士にして貰ひ
 ケーブルで下るときめた父の靴
 (佳)藤椅子の朝は見馴れ山へ向き

柳一 泥鈴 愚人 鶴峯 京二 甫三 變人 泥鈴 金波 木公 好浪 草村 草舟 艸樂 福造 紫水 黃子朗 清月 修造 草村 紅壽郎 光風 京郎 陸平 泥鈴 柳次 黃子朗 梅香 木羊

(同)機關手の眼にも五月の山の色
 (同)何かこう叫んで見たい山の上
 (同)犠牲者を海とロープの裾の霧
 (同)山の方向く海水着拗れてゐる
 (人)山背々と逢へる日の朝となり
 (地)ポケットへキツチリ折つ山の地圖
 (天)拗れてゐる様に山番そつげど
 席題 日向 松
 ルンペンへ日向のかはる橋の下
 逝く春の名残り日向の水溜り
 打水の土に泌み込む日向なり
 日向ぼこ女中コーヒを持って来る
 眼がくらみそうに日向へ孫と居る
 乗合が来て鶏が日向へ出
 日向をさげる女の瘦せてゐる
 日向から暗い吾が家へ歸つたり
 蠅を追ふ仔猫へ初夏の横はまとも
 諦めた戀は日向で横になり
 まゝ事の中に嫁ふてるよい日向
 姑け日向の縁の席を變え
 日向から父黒々と戻つて来
 高架線日向の屋根が光るなり
 失戀に日向が嫌な昨日今日
 日向から戻れば暗い部屋となり
 日向から日向へ嫁の紺緋
 (佳)のこれたまに日向に一人立ち
 (同)矜足を日向に見せて洗ひ髪
 (同)日向から戀人眩うゝ来る
 (同)蟻一つ日向に迷ふまゝに晝
 (同)儲からぬ顔で日向に一人立ち
 (同)一升壺日向にあるは親しめず

同 歎乃 裕介 黃子朗 可仙 紫水 愚人 窓選 艸樂 紫水 都鳥 里十九 紅壽郎 司郎 新水 修造 可仙 長春 櫻月 金波 啓秀 泥鈴 草村 可仙 幸男 光風 木羊 無冠王 同 光風 幸男

(同)胸に手を入れて夫を待つ日向
 (人)剪つて爪を日向へ渡さ来る
 (天)悲しみの家の日向の白いこと
 (地)蒲團干す日向に汽車の音が
 (軸)水淺黄嫁の襷は日向から
 席題 洗 濯 好
 遠雷に洗濯の妻氣がいらち
 洗濯の濡れ手を振つて兒を叱り
 洗濯の波紋に花藻ゆれるなり
 洗濯へ經濟放送な今日也
 洗濯は昨日放した今日雨
 洗濯の飛沫も妻の皐月晴れ
 晝寝フトさめて洗濯の音を聞き
 持てるだけ持て干し物蹴つまづき
 洗濯のついでにと下女頼まれる
 洗濯へ近く子供の水鐵砲
 上一下で洗濯の愚痴話し合ひ
 落籍されてから洗濯のすな女
 洗濯が出来て卸が一つなし
 洗濯のあんなに汚すことがあり
 洗濯の落ちた子を供告げに来る
 洗濯の女と若葉鳥が鳴く
 干し傘へ洗濯物が雫する
 洗濯をする鮮人へ黄昏る
 洗濯の尻へ眞夏の日がまとも
 洗濯のすて水足袋が流れ出る
 洗濯の無性な嫁と思へども
 洗濯が濟んだか子守見にかへり
 片袖がとなりの庭に落ちて居り
 洗濯を派手に手傳ふ小姑
 洗濯の母の白髪はいたゝし

黃子郎 泰典 同 黃子朗 松窓 浪選 光風 泥鈴 都鳥 幸男 無冠王 愚人 白扇 泰典 陸平 乃の字 柳次 木公 紫水 富美三 甫三 櫻月 清月 秋生 欸乃 福造 左一郎 不 幸 山雨樓 まさる

(地) 我た飽きさびものに誕生日
(天) 色々の計畫があり誕生日
喜久路 與詩雄

席題 映 畫 田鶴緒選
比佐緒

俺の戀映畫の筋に似て淋し
スクリーンへ出てゐる社會相
斬ることも倒れることも派手過ぎ
同 與詩雄

寄す波へ真に追つたらアシ
キネマにも飽き女とも別れ
同 綠之助

月はかたむける映畫からの足
同 羅門

(人) 映畫見物先づ字幕を叩き
同 海月

(地) 大寫し目業が煩を傳はつて
同 比佐緒

(天) ナンバラの映畫子供は眞似て
門選 比佐緒

席題 玉 葱 羅門選

(人) 玉葱の滋養價値など説いて父
海月 比佐緒

(地) 横に張る玉葱に大地逆らはす
海月 比佐緒

(天) 玉葱が二つ三つ轉つて自炊
海月 比佐緒

席題 木 蔭 與詩雄選

木の蔭に小アテテストの一團よ
草野 田鶴緒

木蔭として休めば毛虫落ちて来る
海月 羅門

我關せず木蔭を追ふて行く女
同 綠之助

木蔭に來れば我が青春のもの足
同 羅門

木蔭に哀傷を巻く白い指
同 羅門

席題 友 回覽 五選

だまつて歩けば友もだまつて
同 鴉天

成功をしような友へ〇をつけ
同 比佐緒

訪へば今日も友頼杖ついてゐる
同 田鶴緒

友情を無視した夜の蜩鳴く
同 羅門

青空だ快活に話して呉れる友
同 眉美

見送りの友の帽子が目にも
同 與詩雄

ともすれば友のいたでにふれ易く
同 海月

親友を裏切りつゝけ戀暗し
同 綠之助

子を抱いて友交らしき口髯よ
草路

川柳 御旅支部句會

五月廿九日 於松の座旅館 生田翠夢報

正月句會以來休會した例會を新人達の加
入により復活の意氣高く開かれた。路郎師を
初め琴人氏紅氏夢裡氏の参加、それに偶々在
阪中の一きやりの立六氏の用事を放つて來
會、終り近い頃金澤の櫻井漁村氏句會の貼紙
と見ての幸ひと飛びこんで路郎師と久潤の
會談等支部復活第一として甚だ幸先の良
會だつた。句會終了後小宴を開いて交歡する
事數刻、川柳のとりもつ快よい空気に夜の更
けるのを忘れた。

席題 胸 翠 夢選

胸を張り朝の大氣を吸ひ込まん
あや美

胸の内打ちあける程の勇氣なし
又喜

胸癒えず只父の事母の事
夢裡

もう總べて胸におさめて死ぬと云ふ
みつる

胸一つ 決勝點を踏む力
紅

母の胸にそつとしまつて蚊帳に明け
路郎

信ぜよと叩げど細き胸にして
青踏

就職の朝ほがらかな胸の巾
立六

(人) 妻よ語るな胸のいたむ日
青踏

(地) 健やかな父の胸毛に風があり
立六

(天) 胸の痛を知らさじと箸を持つ
路郎

(軸) 胸の廣さに女溺れきり
翠夢

席題 灯 立 六選

五色の灯ごこまで俺を惱ます氣
みつる

神燈の灯へ信心は信じきり
紅

泣き濡れた瞳に美しい街の灯よ
漁村

青い灯に今日の氣前をあなざられ
紅

(佳) 借りに行く心強きの灯がと
同 漁村

(同) 浴し物マツチの軸が短かすぎ
同 同

(同) 氣まつきの二人きりへ灯取虫
同 同

(同) 灯にそむく戀足の憎くさ
同 同

(軸) 走馬燈泣いた兒の瞳に灯が
立六

席題 手 拭 立六

お別れに手拭振つた大業さ
あや美

手拭を腰に働く朝に出来る
紅

涙も汗も手拭でゆく
青踏

道順を手拭とつて教へられ
夢裡

借りものゝ手拭に匂ふ旅の宿
翠夢

(住) 働いてゐる手拭ににほひする
青踏

(同) 手拭を借る、悪友の家
路郎

(同) 手拭を高座しばらく持ち遊び
夢裡

(同) 江戸つ子の氣前手拭意氣な柄
同 同

席題 娘 人選

月給を貰ふ娘へ折れて父
青踏

ソファへ娘は意地を捨てに來る
紅

戀すれど娘はあどけなく通り
あや美

處女と云ふ誇りにちこムパアクト
漁村

打ちあけて泣けば氣がすむ戀心
立六

肩揚がとれて娘の帯娘の惱み
同 同

席題 荷 耶選

ストツクは少なくせよと云ふ主人
みつる

人力で荷物と母はゆれて來る
紅

荷の重い笠の長男遊び過ぎ
あや美

荷輕からず十人の子が動き
夢裡

炎天に荷車だけがほつとかれ
翠夢

机上論荷物を負へばよめきぬ
青踏

かなしき表情となる空だ
畫の月起重機が高く上つた
戀は哀し涙がひえてゐた
哀戀のあのかまきりの雄と雌
笑太郎

川柳雜誌社
神戸支部
友句會(神戸)

六月三日 於華水居 西村明珠報

兼題 三人

三人になつてしまつた社長室
三人の誓ひを知らぬ親心
いゝ月(三人肩を組んで行き
子 供三人駄菓子屋の晝
(軸)氣の合ふた三人組に夜が更

席題 涙

大臣は恩師の顔に涙ぐみ
香水の匂ひで涙ふいてくれ
(佳)落涙の譯を箏笛が知つてゐる
(同)逆境に涙ふ涙へ力湧く
(軸)眞友の涙へ兩手ついてゐる

席題 玉

寶玉へ處女の睡のあこがれよ
國寶の玉は昔のまゝの色
三圓はある貯金玉振つてみる

席題 輪

指輪から思ひ出深い夏となり
戀心よび起こそうとした指輪
(秀)輪替屋は癖の續たころでよ
(軸)輪轉機明日へ使命を持つ活字

席題 覗

支那手品覗けば玉をのむところ
柏餅持つて母親覗きに来

珠選

幸村

春秋

鬼笑太

竹風

明珠

水選

幸村

春秋

明珠

竹風

華水

風選

華水

明珠

春秋

秋選

竹風

明珠

華水

珠選

竹風

幸村

風選

(軸)夕焼けに窓を覗けば向ひの娘
薄化粧夫に留守をたのんごき
落化粧してゐて妻は日本人
薄化粧旦那に襟を覗かれる
泣きに行く顔へほんのり薄化粧

兼題 初夏

初夏の夜のレコードをすべる針
浮雲よ初夏の憂鬱のせて散れ
初夏の今日ではあせつた汗を拭き
初夏の戀へ淡路の近い濱
初夏の娘へ鏡すき通り
此の時大阪の紳樂氏商用で神戸へ來られ
た歸りの足で支部へお立寄り下さつて共に作
句して十二時にお別れをいたしました。

席題 出張

出張に尋ねられてる街の巾
出張所不便になれた晝の飯
出張の首尾に土産を買ひ盡しめ
月給へはしたをつける出張費
(軸)汗珠アイシヤツ出張今日着

席題 ウエルカム

ウエルカム巡查願紐かけて立ち
歓迎の一人は街を斜にぬけ
ウエルカム言葉にこす隙もなし

兼題 暴

川柳社 蟹ヶ池支部句會 (大阪)
六月十二日 龜井愚寵報

兼題 暴

暴力へたり忍従の日を送り
聖代のごこまでつらく暴力史
暴力へ只信念に生き入のみ
(佳)失業は暴力團の中にゐる
(同)一合の酒に酔さるテロリスト
(同)暴力へろうそくの灯がしてゐる

兼題 一錢

一錢と云ふた弟に子が生れ
一錢のはした番だいあづけられ
姉の用一錢もろてたのまれる
一錢をならべ酒屋を酔ふて出
童心は一錢でもを磨いてた
男獨り一錢銅貨もころんで
一錢がこんなになつた貯金箱
米の値が今日から一錢上つて
珍客へ子供一錢れだりに來
叱つても母は一錢やつてゐる
一錢が揉めたあげくの車庫まで
一錢を虚無僧扇子でひい受け
(人)母のない子は一錢と云はぬ
(地)一錢を机の端へ拾ひ上げ
(天)一錢も負けぬ軒店の砂埃り
(軸)一錢かと大人の聲で尋ねられ

席題 色

潮流が彼處に見える海の色
バステルにない色ばかりで日暮
遠くに行く日の耳たぶは紅かつた
違ひから色で見分ける勝負事
色々の玩具があつて勝澤山
新緑に躍る若さの息づかい
色糸を女器用に選び出し

兼題 色

比呂志
愚寵
青鬼
青水
行水
完二郎
愚寵
比呂志
煙太郎
比呂志
青鬼

(人) 灰色の空を火花がゆるがせる
(地) 紫の色レコードが廻はり出し
(天) 女あせた柄三十を思ひ出し
(軸) 女房へ悔ひることなき水の色
かほる
選

席題 夕夜

夕焼へ子供元氣な聲でくる
夕月にへちまは生きてゐる如し
夕焼をはるかに明日の深呼吸
夕涼み天神様のうたが出る
夕食がすみ小兒腹をみせにくる
夕闇があれば都へ上る汽車
晝れて日暮から出る夜勤務
病院へつゝいたは寒い夜
單調なくらしへ夕暗またせまり
煙太郎
選

席題 團扇

公園へ要らない團扇持つてゆき
街鳩が團扇で招くカード下
遊園扇出してごうでもよいお客
涼み團扇が一つ足らぬなり
團扇持つ母へ小兒のたわむれる
池の水團扇はつきりうつして
橋釣へうちわ片手にたづねてる
もう酔つたらしい團扇のつかい
夕涼み團扇を持つてせむしの子
鮎美
選

徳島遊覽めぐり

五月十五日

水谷 鮎美 報

はつきりと見へた淡路を素通し
十郎兵衛の墓へ供養の水をかけ
見送りと別れ徳島までの旅
来て見ればあまりに淋し夕霧碑
方眠
同玉

十郎兵衛阿波の國をば生んで死に
七つ山ちぎつてならべたように
春の海鳥が光つて見へるなり
鐵橋の彼岸が霞む吉野川
夕闇はせまる波止場よきようなら
満月にデツキの風の中に立ち
同美
同

大地吟社同人會

川柳雜誌社

五月十四日夜 綠之助居 尼線之助報

路郎師を迎えた川柳大會は、地方空前の盛
會であつたので、これを記念し、更に明日の
進撃を期すべく、同人會を開いた。一部同人の
更迭あり、一層結束して、鉾川支部大地吟社を
育て上げることにした。

兼題 盛會

盛會だ盛會だ俺の息人の息
盛會にみんな嬉しく酔ふてゐる
盛會へ青空が沈黙するよ
時局講演に講堂ちと狭まし
盛會の挨拶若干そりかへり
若葉のそよぎ同窓會のごよめき
海月
兼題 少女 羅門、田鶴緒共選

席題 少女

早乙女の背に夕陽が眞紅だ
水邊に少女の足白き
若葉の光り少女の黒髪や
椽先で一人物編む春の少女
お轉變を止めませう見つめませう
その清きいつまで守り切れるのだ
華背描く少女をいつしか想へり
同 去 綠之助、與詩雄共選
その過去へ残る女が目に浮ぶ
華村

神經の末梢をつゝいてる過去よ
思ひ出の口笛やみどりの風が吹く
雨垂れのリズムへ過去をもつ捷毛
新聞に廣告された懺悔録
経歴へふと言ひよごむ過去があり
同 綠之助
海月
羅門

梅田支部句報(大阪)

川柳

川村 觀月 報

早起きの微笑へ空は應へたり
餅つきへみんな揃つて早く起き
早起きの習織の紐が見つからず
早起きは先づ新聞をひろげて居
早起きの子へ井戸水を汲んでやり
早起きは煙草の味をほめてゐる
早起きのこの頃冷水浴もやり
(人) 早起きの驪ば、齒をみがき
(地) 早起きのまきとひらく生花の音
(天) 早起きの咳して部屋を通る
同 觀月
同 鮎美

題 早起き

相合傘 温泉街に梅雨深く
重用な話相合傘となく
相合傘女の方は素足なり
圓タツをよけて相合傘でゆき
ひかされる話相合傘で来る
(人) その女中相合傘を見逃さず
(地) 爪びき相合傘が通つて居
(天) 相合傘台詞言て見とうなり
同 坊茄子
同 水選
同 里十九
同 方眠
同 鮎美
同 里十九

題 伴奏

伴奏に知らず、に首を振り
伴奏はわからぬなりに終りなり
同 水選
同 里十九

伴奏の大きく動く影法師
伴奏は花輪の方へ少しより
(人)伴奏に胸の高めきおぼえたり
(同)伴奏リズムは軽くワルツツよ
(同)成功を共によるこぶ伴奏者
(地)伴奏へ純な乙女は手をたゞき
(同)伴奏の低き音色へばら匂ふ
(天)伴奏の力強さにひきすられ
(軸)伴奏へ戀の一夜は暮れるなり

さみだれの宵 (大阪)

五月八日

於鮎美居

街の子

ト居

街の子へうらさびしくも虹の橋

ト居

街の子が長い袂へ夢見てる
繪日傘をさして街の子何處へゆく
二階から見ると街の子の鐵兜

同

同

川柳雜誌社 みやぶく會例會

松江支部

六月一日夜 於龍昌寺精舎 奈良井柳人報

兼題 夏の朝 天痴人選

夏の朝假出獄の瞳に白ろく
大の字が蚊帳を外した夏の朝
朝はよし蟬のリズムに陽が強い
蠶峰へ歩調が揃ふ夏の朝
蚊がかんだノミがかんだと夏の朝
朝露を踏んで西爪を廻つて見

喋 人選
踏 人選
都之介
砂詩朗
哲緒
三雷波
二選
都之介
喋 朗

夏は來ぬ宵のマダムの薄化粧
薄化粧情夫の瞳には惚たらず
兼題 安來拳 喋
安來拳負けた方から唄になり
片肌を脱いだは弱い安來拳
安來拳銀杏返しがゆれて取り
安來拳撰い疲れて猪口をぬり
安來拳文藝工に出來すぎる
兼題 赤ン坊 三雷波選
鯉轆りた赤ン坊泣くばかり
風船がやつと解つた赤ン坊
明るさが解り赤ン坊向きを替え
赤ン坊の重さを賞めて借られる
兼題 穴 九紫、哲緒選
占領へ國旗を立てる穴を掘り
岩穴の神秘かもめが飛んである
穴のあることを知らせる陽の光り
洞穴を覗けば微か水の音
野球する空地に穴が多いなり
蟹の穴濱の子の眼はくらませず
節穴の一つつ嫉妬を燃え立たせ

柳人
喋 朗
馬耳郎
柳人
都之介
玲人
一實
砂詩朗
都之介
九紫、哲緒選
三雷波
卷二
砂詩朗
都之介
馬耳郎
喋 朗

川柳 天王寺支部例會

雜誌社

六月一日 於内藤製作所

豆秋 報

兼題 農夫 琴 人選

歸農して村會へでも出る氣なり
稲を蒔く農夫へ東京から手紙
鎌を上げ下げ陽の浸み土に立ち
農夫いま何か言ひたい田を眺め
(住)土を手にて手を呼んである農夫

柳民
豆秋
南面子
南面子
鶴峰
夕鐘
裸人

(同)農村の疲弊をかきながら掘る
(軸)正直な農夫佛具を繕はせ
兼題 注 射 琴
化粧してチンを注射へ連れてゆく
カンフルへ不安な顔の揃て居り
カンフルを打ってサツサと醫者歸り
注射針光るへ腕の細いこと
(軸)注射も利かす時計のきざむ音
兼題 猛 獸 水
ライオンの自由へ人間あわてたり
猛獸の檻に雀がたわむれて
園長を流石の獅子も知つてある
(軸)飽ゝ程喰はして見たい象の腹
兼題 浴 衣 夕
おない年似ふ浴衣の二科模様
浪花節のうまい浴衣の息子が
浴衣なら浴衣でやはりいゝ女
ホネムーン室の浴衣で橋へ浴衣
兵隊へ兩手へ長く出る浴衣
(住)浴衣着た子の夏やせを笑ふ
兼題 祭 鶴 峰選

柳人
琴 人選
豆秋
柳民
柳村
夕鐘
琴 人選
車選
柳村
夕鐘
鶴峰
水車
鐘選
南面子
裸人
鶴峰
夕鐘
裸人

庭に水打つてビール泡をのみ
ラザオ今水飲んである五月場所
水車
紙上互選句

目八分に金魚捧げて兒は戻り
柳村
柳民

午睡から醒めて金魚の尿を見つけ
豆秋
水車

金魚をつまんで見たい男の兒
裸人
水車

金魚みな浮いてる畫の散髪屋
同
柳村

看板が出来て女房も見てるなり
柳村
豆秋

家傳薬看板の字は讀めぬなり
柳村
豆秋

看板を今度にはバーに塗り替へる
豆秋

川柳
西條支部句會
六月四日
於裁判所 荒井英賀夫報

席題 日 給
五 選
日給日明日が新らの地下足袋
孤 鶴
籠城をして日給を盛り返し
矢 舟
日給のあはれづつ膏はつて行き
英賀夫
席題 情 婦 虹
一 選
甲斐性ある男と言ふに情婦あり
矢 舟
足袋だけは情婦の内でおかされ
孤 鶴
別れても好いほど情婦しぼつてゐ
英賀夫
(軸)傍聴の情婦身動き一つせず
虹 一
席題 煙 煙 孤 鶴 選
殘月の煙ばかりが空にのび
島 山
据風呂の煙り客間を用捨せず
白 虹
氣まぐれな風に町町砂煙り
白 虹
二階借物干臺に煙をあげ
矢 舟
待たされてゐる間たばこの輪を
英賀夫
席題 夜 更 け 白 虹 選
夜そば賣鈴へ靜かに夜は更け
島 山

ルンペンに夜更けの風に眠をさ
隣への氣兼夜更けの簀戸の音
孤 鶴
夜更かしの未だ連もあり牌の音
英賀夫

川柳
高知支部例會 (高知)
五月十日夜 於本興力町 碌々庵開催
中澤濁水報

席題 仁 王 兼 子 選
北風に仁王はつらい威をたし
柳 風
國寶の仁王の顔は消えかゝり
濁 水
顔色も變へず仁王の打たれて
鐵 吉
よく見れば仁王の足を蟻が這ひ
春 水
彫刻を賞めて仁王の見げられ
比呂詩
外人を仁王に叱つて見度くなり
青 板
監禁をされて仁王はおとなしく
柳 風
大空を忘れたやうに仁王睨め
春 風
窮屈なとこで仁王は齡をとり
青 果

席題 空 瓶 比 呂 詩 選
空瓶の口にも蜘蛛は網を張り
柳 風
屑買の駄目を押しする油瓶
啞 聲
一息に呑んだラムネの玉の音
兼 子
勘定へ女給は瓶を額で讀み
紫 白
空瓶も我黨であり景に居る
濁 水
空瓶の芳壇へ春の色が満ち
鐵 吉
空瓶の底へアラシの遠慮せず
青 果
空瓶の夢まなく朝とななり
春 風

席題 新 進 紫 白 選
縁談に成ると新進首を振り
濁 水
新進の際ごい真に理をつける
柳 風
新進は當るに任す熱で述べ
啞 聲
秀才の名で招聘の學校出
悠 羊

新進の作家いまだに二階がり
大手街新進といふメスの牙
比呂詩
新進にされてる記事へ妻も笑み
悠 羊
新進は揉めてる中の空氣に居
春 水
新進は社長の婿と成る噂
鐵 吉
新進に椅子をゆつつかからの趣味
青 果
新進はもう天才にされてゐる
柳 風

親戚と聞いて頭を掻いてゐる
親戚と言ふゆかきまで遠く住み
濁 水
功成つた親戚のある身の誇り
紫 白
親戚を吹聴したいなれのはて
柳 風
親戚の眼に財産の減り工合
志 水
僕は僕親族會の知らぬ事
悠 羊
耳縁へ親戚同志もめが出来
比呂詩
親族會議だのと僕の存在大事かい
春 風
親戚があつて町の名親しまれ
比呂詩
親戚と言はればじめの酔になり
春 風

同 柳 風 選
將校と馴れて機敏な特派記者
青 果
將校の靴音淋し留守の際
比呂詩
もう豫備が近く將校家を建て
啞 聲
直立をさせて將校何か言ひ
紫 白
癖のある聲將校墓はれる
浮 城
將校の和服可笑しい言葉尻
青 果
將校の蹄つた聲が太過ぎる
悠 羊
號令の響將校の肩を見る
春 風
前立に觀兵式の白い風
濁 水
將校を圍む決死の顔と顔
比呂詩
兼題 はだか 濁 水 選
禪のまゝ浴後の月に立ち
啞 聲

親戚と聞いて頭を掻いてゐる
親戚と言ふゆかきまで遠く住み
濁 水
功成つた親戚のある身の誇り
紫 白
親戚を吹聴したいなれのはて
柳 風
親戚の眼に財産の減り工合
志 水
僕は僕親族會の知らぬ事
悠 羊
耳縁へ親戚同志もめが出来
比呂詩
親族會議だのと僕の存在大事かい
春 風
親戚があつて町の名親しまれ
比呂詩
親戚と言はればじめの酔になり
春 風

同 柳 風 選
將校と馴れて機敏な特派記者
青 果
將校の靴音淋し留守の際
比呂詩
もう豫備が近く將校家を建て
啞 聲
直立をさせて將校何か言ひ
紫 白
癖のある聲將校墓はれる
浮 城
將校の和服可笑しい言葉尻
青 果
將校の蹄つた聲が太過ぎる
悠 羊
號令の響將校の肩を見る
春 風
前立に觀兵式の白い風
濁 水
將校を圍む決死の顔と顔
比呂詩
兼題 はだか 濁 水 選
禪のまゝ浴後の月に立ち
啞 聲

キユーピーは裸同志で仲がよし
遠慮せず脱いだ裸の黒いこと
眼ばかりが光つて居ます裸の子
好いからだ検査にこゝ秤を見
もれ上る漁師の肌と春の色
かん秤をけす裸の瘦せた腰
母の背を流すに肉の衰へて
裸体美をじつとモデルの悲しい日
(人)もう一度脱いで乙種は見直
(地)釣竿朝の裸に慣れて来る
(天)行水の白さを月にだけゆるし

青果 柳風 八白 鐵吉 比呂詩 春風 悠羊 鐵吉 紫白 啞白 紫白

柳次居小集例會

六月一日夕 撫順 岩崎 柳路 報選

二次會へシヤズとは別な顔があり
カフエーで待つて一人シヤズを掛
客足へ又一しきりシヤズはなり
つゝまゝ母娘がシヤズの街を行く
(人)ステッパの疲る露臺(シヤズを避く)
(地)赤青の灯とシヤズや港の夜
(天)ダンサーの或夜悲しシヤズでの
(軸)冗談の様に見えるシヤズバンド

路選 一惠 松代 十古 蝶古 仙古 同路 柳路 涙選 一惠 蝶古 十古 松代 柳次

席題 遠くに聞ゆる三味線 仙 涙選
席題 ちと不似合な三味の音 一 惠
夏座敷河をへだてゝ三味のさえ 蝶 古
夕涼みふと氣に觸れた三味の音 十 古
流しする三味の音路次の中へ消え 松 代
妾宅に來て居るらしい三味の音 柳 次
席題 人妻 蝶 古選
人妻へ女房の齡を考へる 十 古

人妻の元は支人が長煙管
人妻と知らずに惚れた美人局
人妻と云ふ丸鬚を意識する
(人)人妻にして派手過る帯の色
(地)人妻の少しあきれた穩し藝
(天)人妻にからかつて居る九宮鳥

一惠 松代 仙淚 松代 柳路 同路

角力吟
胸騒ぎするとて母の書く手紙
裏口を覗けば兄のラアシーン
代書屋に私生兒ですと小さい聲
すゝり泣く聲へ眼さめる旅の宿
隣室の衣擺れ惱まし春の宵

松代 蝶古 柳路 松代 十古

水無月句會 (大聖寺)

三人會報

スポーツ 茶撫朗選
半玉もスポーツ論へまくし立て
スポーツが得意會社につながる
一時伸びて世界の 新記録

吉祥 吉祥 白花儿

アーチ 白花儿選
さあ御出でなさいアーチやと出外
魂を迎ふにしては大アーチ

茶撫朗 燕子花 燕子花 白花儿

指紋 吉祥選
指紋室時計の刻む音ばかり
童心を呼び起しても役立てず
迷宮へ指紋ちつとも役立てず
ハンドルの指紋を消して笑ひ去る

燕子花 茶撫朗 白花儿 山々

川柳 鶴町支部句會 (大阪)
雜誌社
五月十五日 白峯居に於て 變人報

席題 差向ひ 五選
差向ひごつちも金齒光らせる
差向ひ女矢張り無口なり
差向ひ膝のあたりの老ひた父
打明けて仕舞ふと決めて差向ひ

小柳子 白峯 變人 雅幽

席題 同情 岩 石選
同情を集め盲の安來節
同情の餘り巡查は非難され
同情ア老婆も障がけになり
同情をさされる姿でめぐんで居
同情に活きる世間を淋しがり

變人 小柳子 雅幽 變人 小柳子 雅幽

席題 狼 狼

狼狼の羽織の紐が見つかからず
狼狼の後で自分を笑つて居
狼狼の塚筋をば突つ切りて
(佳)飛び出して又引返す火の始末
(同)狼狼しながらも我が子はなげ

變人 小柳子 雅幽 正路 人選

席題 筆 變
筆先がふるふるまゝに書いてゐる
履歴書を書くのに新の筆を買ひ
悪筆の書けぬ手紙のもごかしく
こはそうに筆を握つた一年生
(佳)戀文へ筆が自由になりません
(同)書置き筆を帳場で借りてる

正路 寛柳 のぶ 白峯 小柳子 雅幽

兼題 月 給 雅 幽選
月給日賑は娘としてうれし
月給へ妻算盤を持つて來て
(佳)髯剃つて明日の月給待つて居る
(軸)サラリーの覗きあふてる臺所

變人 變人 雅幽

川柳社 神戸支部例會 (神戸)

六月十三日

於八宮神社

西村明珠報

兼題 雨

明

珠選

逗留ときまつてからの雨もよし
 しんみりと意見を聞かず夜の雨
 日曜の雨レコードへ所在なし
 藤椅子へ屈託のない雨の庭
 ホウブリーを皆んな洗ふて雨後の滯
 雨ふりへ長い父さんになつてやり
 親類があるこの町の雨を抜け
 牌捨てる音も春雨らしい宵
 トタン屋根突き抜けるは降って来る
 幼稚園雨を女中の背で来る
 返事してくる者どし雨だなア
 採用にきまり朝も降つてゐる

朝の社へ舞妓の日傘よくまはり
 清水へ舞妓の鈴はよく晴れて
 母親に煽がせてゐる舞ひざらえ
 舞は死も角衣裳の方へ金をかけ
 白足袋の裏がよごれて舞ひ終り
 舞ひ込んだピラは商賣仇なり
 儂くも明日を求める舞を舞ひ
 憂鬱のまざれこんでる舞踏場
 (秀) 樂屋へ舞つたれたくづれやう
 (同) 舞ふ事になつて親がはづせやう
 (同) 舞扇旦那ばらりときつい音
 席題 べんち 竹

ベんち迄ちんばの犬がついて来る
 ルンバへ港が暮れる古ベんち
 捨てられた女へベんち冷へてくる
 打水の雫へ届く座敷の灯
 新記録雫のまんま寫される
 雫にて足りる繪具の皿の縁
 撒水車雫になつて辻を折れ
 (人) 電線の雫へ街の午後が晴
 (地) 水薬筋の雫に囚れてる雫
 (天) 淋びし手にひるる雫

心とは別に坐つて意見聞く
 決断のつかぬ男が坐り替へ
 母少し坐り直して縁の事
 坐らせる旦那の息のあつい事
 いかげ屋が坐つたとこへ子がより
 (人) 參禪へ邪念は足を先づ翳ひ
 (地) 御坐る閑なし今日の青畳
 (天) 御主人の席へ來客坐りかへ

なつかしい訛へ故郷を聞いて見る
 同郷は釣りの話の自慢だけ
 同郷の女だまされそうにゐる
 同郷に貰つて欲しい娘の話
 同郷の世話で日給五十銭
 喧嘩した事も同郷親し分け
 (佳) 同郷へ土の臭ひの御裾分け
 (軸) 同郷の情け埃りの下駄をぬぎ

新兵の寫眞は肩を怒らせる
 叫たかれた肩心齋橋を歩かされ
 憂鬱の肩へ柱の角がたち
 警察が肩を入れたる夜店の灯
 寒い肩女云ひたいてる夜があり
 厚司着て肩の強さを信じ切り

阪大川柳會 (大阪)

六月廿五日

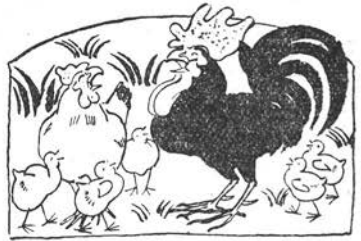
兼題 浴衣

路 選

特價品浴衣は安く扱はれ
 官能の表皮が浴衣疲れたる
 尻かければ浴衣も替乏めき
 面だけの違ふ浴衣が席につき
 浴衣着る頃から心やすくなり
 浴衣がけわたしが抱くに俺も抱く
 新妻は浴衣を着てもかしこまり
 縫帯の白く浴衣の君さきびし
 案山子の様に浴衣を父は着て
 色街を廻つた丈けの貸浴衣
 四十九里浴衣の袖も涼しかる
 (人) そんな浴衣が母かど主婦の友
 (地) 浴衣着れば犬は散歩と心得る
 (天) 尋ねる人浴衣のまゝと書いてある

柳窓亭春彦想安句會
 日時 七月一日(金曜日)午後七時
 會場 小問物事務所樓上
 (大阪市電線局南久米町下)
 (車道ノ北北へ二十番御前)

兼題 「螢」 三句 本田溪花坊先生選
 「快晴」 三句 麻生路郎先生選
 「花瓶」 三句 岸本水府先生選
 會費 三十銭
 (當夜の收入全部を春彦先生に贈呈し御來
 賓諸氏に會費なきやむと先列にて送呈す)



生郎路 窓の輯編

▼今年の梅雨は大して降らないと云つてカラ梅雨でもない。今に暑くなるのだらう。ソロ／＼煽風機が廻轉をはじめた。

▼前號は「川柳の夕」の報告號の觀があつたが、「川柳の夕」に出席し得られなかつた。多くの柳友達、大盛況であつたことを報告して私達と同じ喜びに浸つて貰ひたかつたのである。幸ひにその反響も又大あかつたので重ねてよろこんで頂きたい。

▼六月四日の夜、京都支部の加茂川句會が昭和圖書館で開催された。これも百號記念の延長で久しぶりに京都の柳友たちに會つた。ひげをホシヤ／＼生やした松窓君や若い血潮に燃えてゐるやうな幸男君に會へたのも愉快であつた。すべてにひかえ目

勝ちな京都君の司會で八十名からの出席者は靜かに作句三昧に入つた。京の夜は句の夜だと思つた。散會後、綠雨、琴人、鶴峰、變人の四君と京の街に飲んだ。その足が自然に花見小路へ運ばれたのも京のアトモスフエアがさうさせたのであらう。翌朝平野家で再び洋杯を手にして歸阪した。

▼六月五日の夕から生田翠夢君と宇治の縣祭へ行つた。宇治橋の下に螢が光つてゐた。

▼六月十日、綠雨君が阪大病院の岩永外科へ入院した。十四日に盲腸炎の手術をうけたが経過が表敵によく二十五日に退院目下餘後の静養にいそしんでゐる。入院中、阪大川柳會の人々特に長崎博士、井上博士の御骨折に俟つものが多かつたことを深謝する。

▼手術後の経過を案じてゐたので自分も度々顔を出したが廿三日には、すっかり元氣でもう退院してもいいやうな顔付きである。寧ろ私の方がベツトの上に乗んでゐるのがふさわしい程である。そこで二人で病院を脱出して琴人を訪問して驚かした。早速琴人君と私が祝盃をあけた。私さ／＼お見舞下まつた方々に、わざわざ厚く御禮を申上げる。併せてもう大丈夫であるこ

とを御報らせしておく。

▼十一日の本社の句會は綠雨君が入院だし、私も健康を害してゐたので缺席した。山雨樓君が「川柳イデオロギイ」を談した。そんな譯で私は神戸支部の句會へも缺席したが、琴人君や艸樂君等が出席した。

▼撫順の岩崎柳路君は、よく奥地の方へ旅行する。六月四日の通信によると「昨夜當西安より六里奥の部落刑務所に暴動があり匪賊も合同したので大分騒ぎが大きく公安隊内に在留民と共に一時逃げ込みましたが今朝皇軍來り安全を得て一同喜んで居りますが、未だ奥地の旅行は不安でありませぬ。馬賊が來れば公安隊長も縣知事も逃走するやうな状態であります。日本人は皆モルヒネ、コカイン、ヘロイン亞片の小賣店なので、これ又驚いて居ります。兩三日中に歸撫致します」といふ状態でなか／＼樂でないらしい。君が安全を祈つてゐる。

▼二三ヶ月休んでゐた御旅支部の句會が五月二十九日の夜、松の座旅館で開かれた。新幹事翠夢君が新らしく馬力をかけて新顔が殖えてゐる。關西訪問で會つた武田玄六氏(東京)が出席されたのである。聞けばこは玄六氏の定宿なんだそうだ。それに

しても今まで知らなかつたのが不思議だ。句會中に、女中が一枚の名刺を私に渡した。見れば金澤の櫻井漁村氏である。電車通りの廣告を見て靜かな旅館らしいので、今夜はこ川柳雜誌の支部の句會がある。ひよつとしたり來てゐられるだらうと思つて刺を通じた譯ですとのこと。早速會場の方へ席を移した。期せずして、賑やかな句會になつた。

▼西島〇丸氏から「この間は御たより嬉しく存升。實のところ麻生さんはあんなに畫が巧みでは今の今まで思つて居りました。何んでも、器用なんです。御禮まで」といふハガキをうけとつた。これは、御旅支部の歡迎會の餘沫とでも云ふべきか、まだ飲み足りなかつたらしい。玄六琴人、翠夢の三君と私が深夜の大阪を味づく自動車を飛ばしてからの産物なのである。私の畫の巧いことを今ごろ知る。私んざア、〇丸さんにも似合はない。

▼大連の大島清明氏からも、撫順の柳路君からも新滿洲國視察をすめられたのであるが未だ機會が來ない。どうせ行くならハルビンまで行きたい。ロシヤへ行く

機会を待って、露骨の研究をはじめたのは大正のはじめだつたが、そのころのロシヤはもう歴史上のロシヤになつてしまつた私のロシヤ語も何處かへ影をひそめてしまつて来た。私の手許に世界戦争で逃げて来たロシヤの青年一家の寫眞が残つてゐるばかりである。

▼かほる君、里十九君、二南君
華水君等は、明けても暮れても罷物かやりたくてたまらず、近く句會の餘興として上演するさうである。劍道四段、二刀流の使ひ手である二南君が、劍劇に出演するのであるから、ヒヤヒヤするだけでも納涼劇の價値は充分だらう。目下二南君が脚本執筆中である。かほる君は天性の女形。里十九君は多年淨瑠璃で鍛へた名せりふで一座を壓するだらうし、華水君は二枚目役者

としての實力を發揮するたらうし、その他梅田支那の鮎美君、夕鐘君等がダークホースとして注目されてゐる。でも物凄くことではある。社會劇なら出ていゝといふ色氣のあるのが葎路杏三、柳秀、素人にかいくひ乃郎である。近ごろ不景氣知らずの話だけに少しく天機を洩らし

▼蛭子省二氏(朝鮮)から「謹啓雜誌六月號つく「川柳の々」の盛況を充分に知るを得て喜ぶ御骨折り遙察申上ぐ、専ら御健安を大抵ではない事と存上ます。◎武庫川研究四十八旬目迄本日送稿。小生持病季の爲め出社ごころか醫師のお世話になりつゝあるも發作やまず安靜、然し餘りひどくならぬ中に寫眞でもお目に掛け度しと思ふ以上」とい

ふ通信をうけとつた。同氏の精進振りに敬意を表するとともに不斷の好意を感講してゐる。

▼金澤の安川久流美氏から五月三十日發信で新愛知支局を退いた通知をうけた。理由は述べてゐないが、そこには男として退くべき理由があつたのであらう。今後の同氏の上に幸多き日の來らんことを遙に祈つて止まじ。同氏の三人のごごものためにも特に平擔な人世であることを切望する。

▼朝鮮の南山吟社から「川柳三昧」を六月號限廢刊するといふ通知に接した。滿五ヶ年の間奮闘を續けて来た同志が柳界から影を没するところ甚だ遺憾である。多年はぐくみ育て、來た人々の心情を懷うと沈み行く巨船にそぐ涙に等しい涙が流れた。再起の一日も早やからんことを祈る。

▼病める柳窓亭春彦氏の慰安會が舊柳窓社の人々の手で七月一日の夜小間物事務所樓上で開催される筈。私も出席することを望む。

▼七月三日に青函親善川柳大會の第三回が本年は函館で開催されることになつた。第一回に招かれて行つた私として、この會が親善と共に研究方面へも伸展せんことを切望して今大會も盛會ならんことを祈つてゐる。

▼六月三日、近江砂人君の嚴父が長逝された。哀悼の意を表する。

▼名古屋の柳誌「鯨鏗」の功勞者大曾根大吉氏が六月二十三日に急病で永眠された。謹んで悼む。

▼今度は消息で埋めつくしたが、次號は八月特輯號である。いづれ素晴らしいものにしたいたいと思つてゐる。

川柳書架 (四八)

川柳三題集

西原柳雨著
再生外骨編

▼編者再生外骨氏の「はしがき」の一端を抜萃する。

(前略)彼は古川柳研究に熱心さいふ點で

は我邦に於ける空前唯一の偉人であつたと思ふそれは彼が教職を辭して後古川柳の研究に入つて以來日夜これに没頭して他事には少しも頭腦を使はなかつた事であるイクラカ家計上の苦悶はあつたであらうが高等理智に其くこまは執筆でも坐談でも彼は古川柳の外に出なかつた(中略)予は今回柳雨子の萌著「三題を合冊して發行する事にしたこれは予が古川柳關係の雜誌や單行本を發行して居た大

正十三年二月柳雨子に出版原稿を要請した際附與されたもので云々(下略)

▼昭和七年五月二十五日發行、定價一圓五十銭、四六版相綴二六四頁、著者西原柳雨、發行者宮武外骨、發行所東京麴町區飯田町六丁目株式會社内外社

▼本書の著者は既に故人となつてゐるのであるが、その生前何處までも考證的研究法で古川柳にメスをあてた人として普く知られてゐる。

投稿規定

- ▼ 投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
- ▼ 「近作柳樽」は全家の雜吟を募る
- ▼ 「川柳塔」への投句は同人及び社友に限る。
- ▼ 光耀抄は女性作家に限る。
- ▼ 各地會報は半紙判の原稿紙に清記の事。
- ▼ 文章は二十字詰半紙判原稿紙に認める事。
- ▼ 書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」を封筒に未記する事。
- ▼ 締切は嚴守されたし。
- ▼ 投稿其他につき御問合はすべて返信料封入の事。

募 集

第九卷第九號課題

七月五日締切

(各題十句以内)

- ▼ 黃昏 長崎 柳秀選
- ▼ 眞相 阿部 閑生選
- ▼ 屑 西田 艸樂選
福田 鶴峰 共選

第九卷第十號課題

八月五日締切

(各題十句以内)

- ▼ 教會 安井ひろし選
- ▼ 池 中見 光路選
- ▼ 募 楊井 二南 井選
日野 華水 選

每 號 募 集

- ▼ 近作柳樽(十雜吟) 麻生 路郎選
- ▼ 光耀抄(雜吟) 麻生 葭乃選
- ▼ 各地柳壇(會報)
- ▼ 文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切(編輯に關する件、投句、購讀廣告)の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます。

價 定

一 部 金 拾 錢
 牛箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
 壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢
 (半ヶ年分以上御送金の方に)
 (は投句用箋を贈呈致します)

料 告 廣

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます

▼ 御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼ 誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼ 送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます ▼ 御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます、但集金郵便(二年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▼ 御注文には何月號よりと御指示願ひます▼ 轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼ 川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和七年 六月廿五日印刷
 昭和七年 七月 一日發行

第九卷第七號
 (毎月一回一日發行)

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二 郎

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發 行 所

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
 柳 雜 誌 社

大 阪 市 住 吉 區 平 野 西 之 町 八 三 番 地

電話 替 欠 帳 三 一 五 一 四 番
 電話 天 下 茶 屋 二 五 七 九 番

振替 大阪 七 五 〇 五 〇 番
 電話 天 王 寺 一 一 六 七 番

事 務 所

川 柳 雜 誌 社

賣 捌 店
 (大阪) 大賣捌 二盛社書店。(明文堂 其他 市内 各書店)
 (東京 仲見世) 玉森堂(神戶) 米田、後藤、寶文館(函館)
 石塚(京都) 三宅 (松山) 弘文舎 (石川縣) マコトヤ

道プテから公立社の棚へ

圓本の洪水から、本が非常に安くなつた。本は寶石などのやうに高價なるが故に尊いのではない。寶石よりも尊い本がこんなに安く買へる時代が来たことは我々讀書子にとつては有難いことだ。安い本をもつと安く讀む方法として古本を買へばいゝ。古本と云つても虫食本のことではない。古本が非衛生的に考へられてゐた時代は遠うの昔に過ぎてしまつた。道プテの次で公立社の棚をのぞくことを一つの趣味としておすゝめしたい。

(路郎生)

古

本

は

高價に申し受けます。
御通知次第早速參上確實
迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が従來の店の一軒置いて北隣へ移りました。従來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入
電話 南 五六二番

カナメ喫茶店

朗らかな心と愉快な顔は
カナメ喫茶店より
大阪市南區疊屋周防町
東入南側

夏の夜のそよる歩きのおついで
にお顔をお見せ下さいー腹乃
大阪市西成區玉出本通
三ノ三六(仲小路)

喫茶店 **キンク**
電話 天下 二五七九番
茶屋

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙
附(金文字入)で書架を飾るに
ふさわしい簡素な裝幀に出来
ました。

第一卷 第二卷 各金五圓也
第三卷 第四卷 各金參圓也
第六卷 第七卷 各金參圓也
當分第五卷に限り

特價(合本) **金壹圓五拾錢**

尙古い川柳雜誌御入用の方に
は特に左の値段でお頒ち致し
ます。いづれも下記宛御申込
下さい。

第二號より第四十七號まで
各一部 金拾錢
第四十八號より第八十三號迄
各一部 金貳拾錢
(但し一號九號十二號廿一號
廿五號廿六號廿七號はありま
せん)

短冊頒布

筆者 **麻生路郎先生**
上短冊一葉金參圓 送費不要
作品は入金順に發送、振替
は「大阪七五〇五〇」を利用
されたし(旬の希望の方は
お知らせ下さい)

申込所
大阪市住吉區平野西之町
八三番地
川柳雜誌社事務所内、
短冊頒布係

懸賞川柳募集

題「洗ふ」 路郎 選

七月十日締切

その他雑吟を募る

▼用紙 官製ハガキ(化粧柳
壇と明記の事)

▼賞品 秀逸數句薄謝を呈す
▼投吟

大阪市玉出本通三の三六

麻生路郎氏宛

化粧新聞社

社告

川柳手拭 路郎手幹

の染筆 一枚 金拾五錢

(送料共)

清 酒

白 鶴 禮 讚

白鶴をチントンシャンシ提けて来る
 午後六時白鶴が待ち妻が待ち
 百事意の如く白鶴呑んでゐる
 白鶴の機嫌へ押す子曳き出す子
 腰掛へ白鶴狭う飲むうまさ
 來意も聞かず白鶴の猪口を強ひ
 白鶴が縁こはなりぬ君も僕
 白鶴に素直な父こなつて寝る

攝津灘

嘉納合名會社釀



大正十三年三月五日第三種郵便認可(第一號)日發行
昭和七年六月廿五日停業前本 昭和七年七月一日發行

川柳雜誌

(第一〇二號)

定價金三拾錢

養榮の髪毛ぬせ戟刺を髓腦

ドーマポ椿豆伊^イ

精の椿島大 一唯産國

輝く美髪



伊豆椿香油本舗

いさ下用愛御に直今
りあに店薬品粧化名有國全